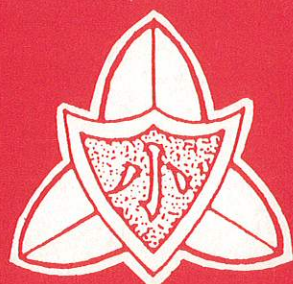
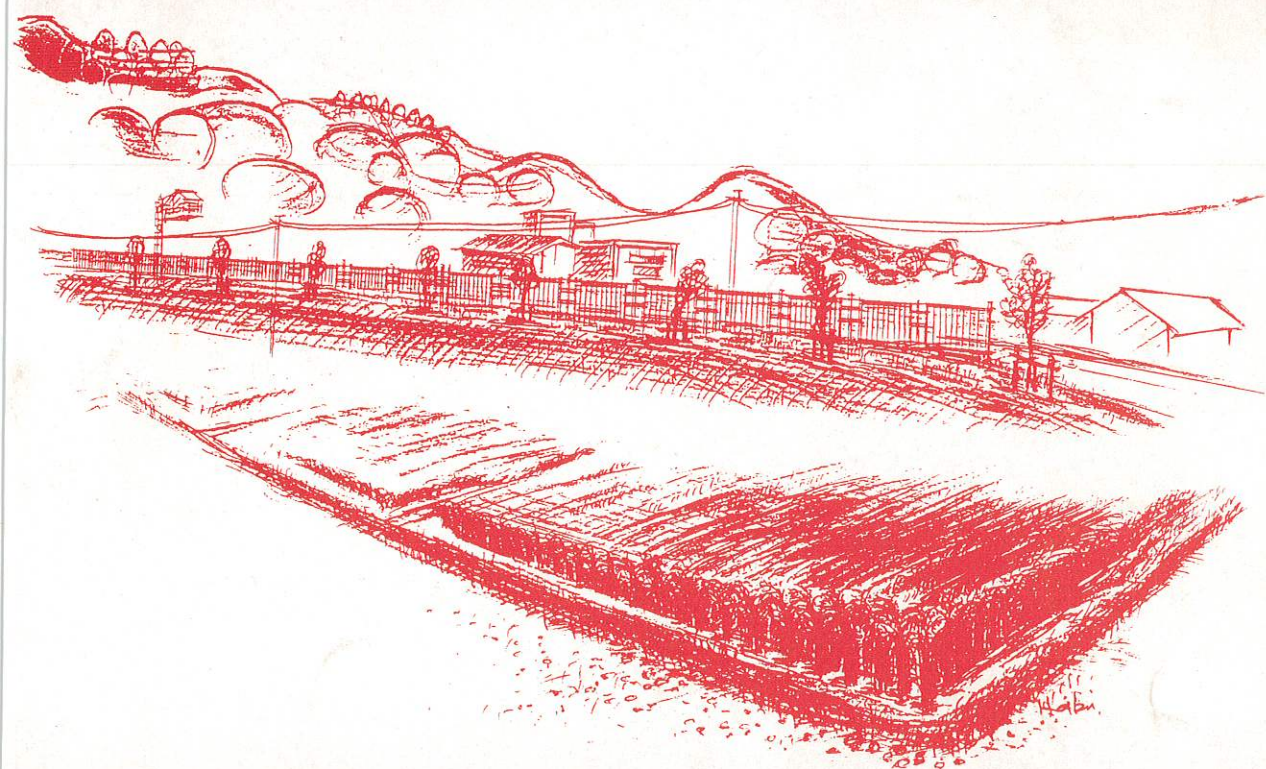


きょうど



下北手



秋田市立下北手小学校

は　じ　め　に

校長　三　浦　憲　子

「きょうど」という意味は、「生まれ育った土地、ふるさと」ということです。だれにでも「きょうど」はあります。みなさんにとつての「きょうど」は、「下北手」ですね。

さて、みなさんは「きょうど」下北手についてどれくらい分かっているのでしょうか。下北手のよさをどれくらい感じているのでしょうか。あたりまえのことで、身近なことなので、あまり深く考えたことがないという人が多いかもしれませんね。

「きょうど下北手」は、第1号が昭和47年に、第2号が昭和60年に発行されました。この本は第3号ということになります。

この本は、前の2冊と大きくちがう点があります。それは、みなさんもこの本作りに参加したということです。夏休み前に、「きょうど下北手」についてどんなことを調べたいか問題を決めましたね。そして、夏休みには、その問題について一人で、またはグループでいっしょうけんめい調べました。地域を歩いて調べたり、くわしい話を聞くために、お家を訪問してインタビューしたりしましたね。

調べたことをまとめるために、学校に集まったグループもたくさんありました。

一人一人が調べたことはちがっても、きょうど下北手を知ることができたということはみんな同じですね。下北手のよさを感じることもできたということはみんな同じですね。

この「よさ」を大切にして、「よさ」を残してくれたお家の方々や地域の方々に感謝し、「よさ」を守り、「よさ」をふくらましていってください。あとの時代にやって来るこのきょうど下北手で暮らす人たちのために。

目 次

はじめに	校長 三浦 憲子	1
目次		2
下北手一般図		4
下北手小学校学区地図		5
下北手のうつりかわり		6
いろいろな産業		9
人 口		10
土地のようす		11
お寺と神社		13
民間に伝わる薬草		14
下北手の伝説		15
学校のうつりかわり		22
むかしの勉強		27
空から見た下北手小学校（1）		32
旧校舎全景		33
空から見た下北手小学校（2）		34
新校舎全景		35
旧校舎平面図		36
新校舎平面図		37
歴代校長		38
小学校時代の思い出		40

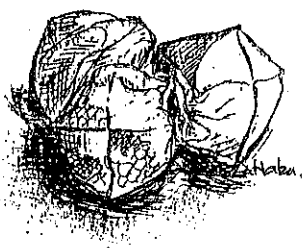


タイムスリップ下北手

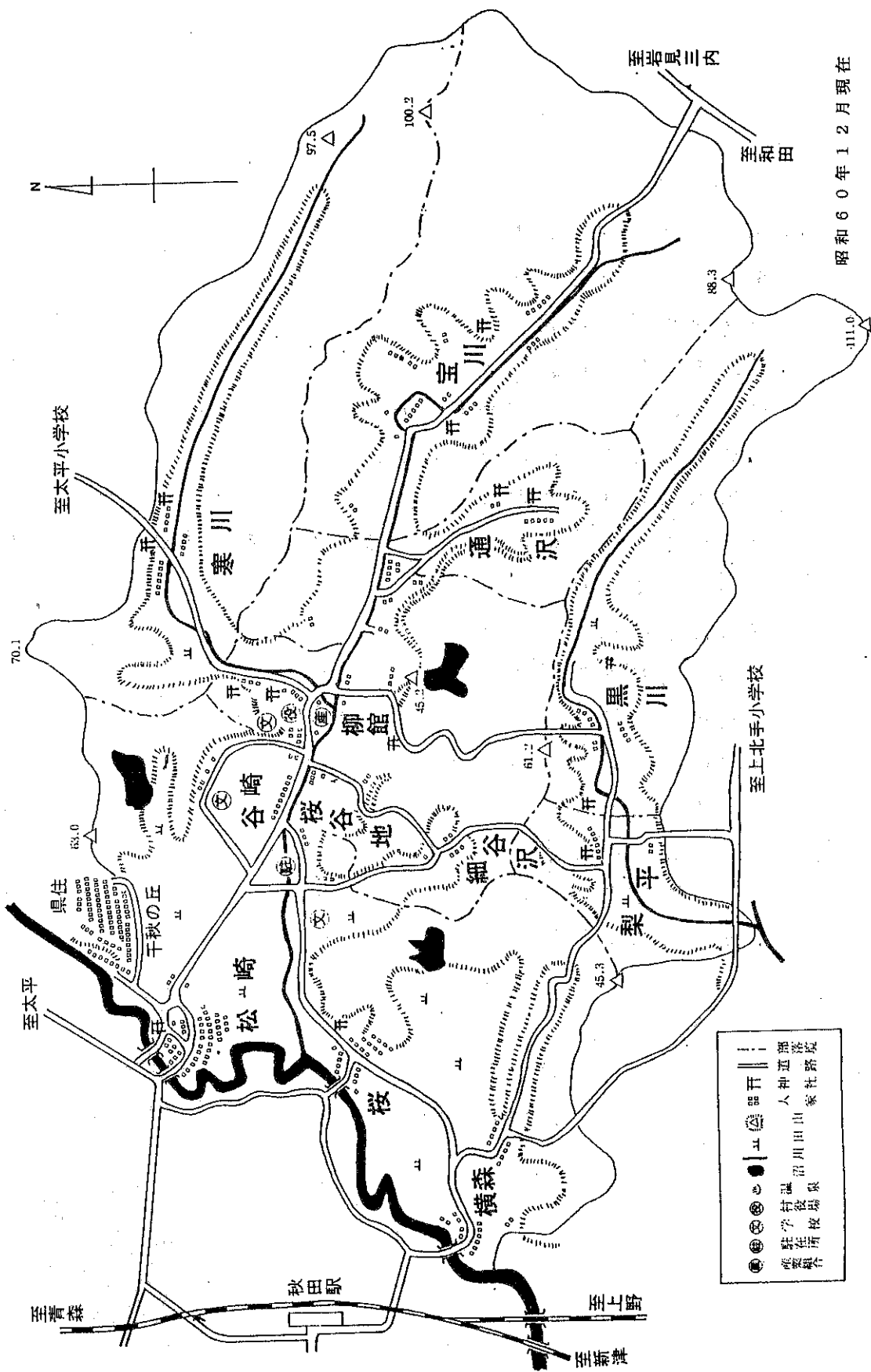
まどをあければ	5 0
下北手小学校校歌	5 2
下北手小学校校旗	5 3
むかしのあそびって楽しいな！	5 4
下北手の偉人『柴田傳兵衛』	5 8
古田重二良さんを探る	6 2
おじいさん、おばあさんが子どものころの服装	6 6
むかしの食生活	6 8
どんな家に住んでいたのかな？	7 2
こんな道具も使っていたよ	7 4
下北手のお祭り	7 6
戦争中の下北手の様子	8 0
今、川があぶない！	8 4
下北手にできた中央インターチェンジ	8 8
町内別名字調べ	9 2
下北手の川や沼にすむ魚	9 6
あとがき	9 8

題 字 三浦 憲子

表紙絵 羽 深 進

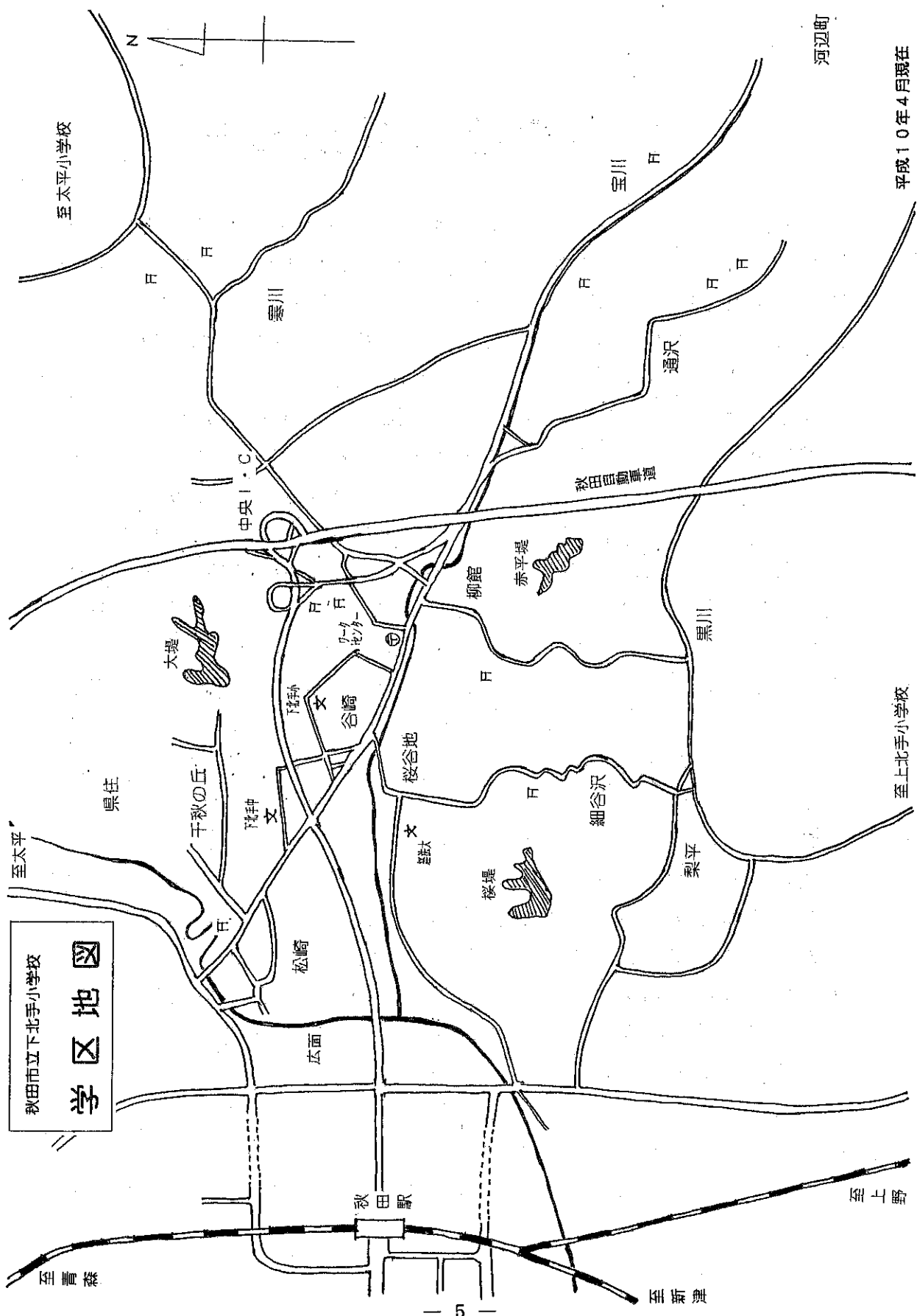


秋田山下北手一般図



昭和60年12月現在

秋田市立下北手小学校
学区地図



平成10年4月現在

下北手のうつりかわり

大むかしは蝦夷^{えぞ}が住んでいた土地で、草木の生えしげっていた未開^{みかい}の土地でした。奈良時代（およそ1200年前）、都^{みやこ}では唐^{とう}の国（今の中国）と交通し、その国から入った文化が進み仏教^{ぶつぎょう}がさかんでたいへんにぎやかでした。秋田市のあたりも「秋田村」とよばれるほど人々も多くなっていたといわれます。

聖武天皇^{しょうむてんのう}の天正^{てんしょう}5年（733）に出羽^{でわ}の柵^{さく}を秋田の村^{しだい}、高清水^{すがた}ガ岡に移されてから次第に歴史上に姿を表してきました。

こうして寺内中心^{てらうち}の土地には、あるていどの開拓^{かいたく}も進み、文化も栄え、出羽^{でわ}の柵^{さく}は秋田城として長い間中央に知られてきました。

それから後、安東実季氏^{あんどうさねすえ}が湊城主^{みなと}として土崎に住み、500年以上も前に城下町として栄えました。そして、1602年（慶長^{けいちよう}7）佐竹義宣氏^{さたけよしのぶ}がこの地に来て久保田城（今の千秋公園）をつくり、今の秋田市のもとをつくりました。秋田市の地域はだいたい農業生活が行われ、よく開発^{かいはつ}されて収穫^{しゅうかく}の豊かな農村であり、川尻村とよばれ今の秋田市（旧市内）の大部分にあたっていました。そして、その中心が大町2丁目ふきんであったといわれています。

さて、下北手はどうなっていたでしょう。

先に「河辺郡」と言っていたのがいつごろからかはつきりしませんが、続日本紀（843年）に「出羽国河辺郡^{でわのくに}…」とあるのが初めてのようで、和名抄^{わみょうしょう}には「河辺郡^{かわのへ}」と記されています。その後、室町時代後期には豊島郡^{としまぐん}となりました。つまり、湊城主の家来となった豊島重村氏^{しげむら}の領地^{りょうち}となったのが黒川、梨平であり、そのほかの各村は太平城主永井氏の領地となっていたのです。

では、この「北手」という名はどのようにしてできたのでしょうか。これは「北の方」という意味で、四ツ小屋にある「小阿地^{こあじ}」から見たものか、豊島城を中心として見たものかは、はつきりしてい

ません。

享保郡邑記という本に書かれていることから考えてみると、今の上北手にある百崎ももざきと荒蒔あらまきを前北手、下北手にある黒川のことを中北手と言っていますが、戦国時代せんごく（400年くらい前）には、黒川、梨平を前北手、そのほかの所を後北手とよんでいたようです。

慶長1年（1596）豊島氏じょうのすけがほろぼされて、秋田城之介の領地になりました。

その後、秋田の殿様となった佐竹氏が3000人の家来をつれて慶長7年（1602）9月に土崎にやってきました。そのため土崎の湊城ではどうしてもせまいので、慶長9年久保田の神名山に矢留城（久保田城・秋田城）を築きずきました。この城は石垣いしがきを使わないで平地より25メートルも高く土をつみ上げ、周りに内ぼりと外ぼりとをほりました。しかし、矢留城が築かれた周りは窪地であったので「窪田くぼた」といわれ、そうしたくぼんだ田のところが後に「久保田」と書く地名になったのです。

その後、慶長17年（1612）には久保田城下町がひととおり完成しました。東側を内町うちまち（侍町さむらいまち）西側を外町とまち（町人町ちょうにん）とよぶようになったのです。また、この年のお城の「二の丸」に初めて時鐘じしょうがつくられました。

また、秋田の国では米や材木の生産を主としていたので日用品の製造せいぞうはなく、大阪から出た船は門司もんじを通り敦賀つるがにまわり越後えちごを通る間に土地土地の生産品を積んで土崎港に入港しました。

茶、紙、衣類いるい、家具かぐ、陶器とうき、綿わた、小間物こまもの、畳表たたみおもて、雑貨ざっかなどがありました。それが茶町（雑貨）大町（衣類）四丁目（木綿・絹物）五丁目（たばこ）六丁目（木工具さかな）肴町（海産物）八日町（塩）鉄砲町てっぽう（野菜果物）などの町で売り買いされていました。

また下北手では宝川、通沢ふきんが最も早くひらけたようで、享保郡邑記（1730年編）には、各村の戸数を次のように記しています。

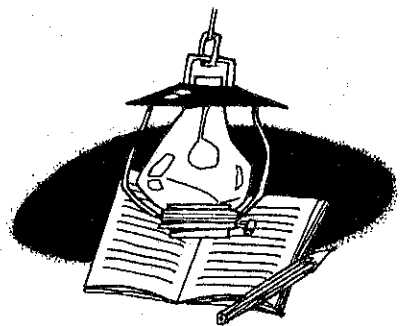
村	戸数	村	戸数	村	戸数
梨平	1 8	宝川	2 3	柳館	1 1
黒川(中北手)	1 8	寒川	2 4	賀川	7
通沢	1 5	赤平	1 5	松が崎	1 7
前田	1 4	細谷	7	桜	2 3

寒川が多かったのは永井氏の城があった太平との行き来が多かったためだろうと言われています。

さて明治時代に入ってから、明治6年(1873)に秋田県を7つに大きく区分し、48小区に分けました。第5小区には通沢村、寒川村、柳館村、梨平村、黒川村、桜村、松崎村、宝川村などがありました。

その後、明治11年12月(1878)に郡制^{ぐんせい}がしかれて、第5小区が河辺郡となり、その中心が牛島町(今の秋田市牛島)になりました。やがて、明治25年4月(1892)から町村制となって秋田県河辺郡下北手村となったのです。だから前に記した〇〇村は下北手村字〇〇となりました。

これがずいぶん長い間続いて昭和29年10月1日から秋田市にはいり、秋田市下北手となりました。



いろいろな産業

「土地のようす」

	大正14年	昭和3年	昭和45年	昭和59年	平成9年
田	386.6ha	388.0ha	340ha	270ha	242ha
畑	40.7ha	40.7ha	17ha	11ha	10ha (ハウス16a)
山林	552.7ha	522.7ha	—	—	—
宅地	18.5ha	10.9ha	—	—	—

「農産物の生産」

	大正14年	昭和3年	昭和45年	昭和59年	平成9年
米	127.32t	124.26t	156.5t	135.5t	88.5t
大豆	24.6t	16.6t	—	—	—
じゃがいも	8.2t	—	—	—	—
ねぎ	0.76t	—	—	—	—
ごぼう	1.65t	—	—	—	—
かぼちゃ	2.6t	—	—	—	—
す、きり	25.1t	—	—	—	—
薪炭	1,966 棚	—	—	—	—
伐木	691 石	—	—	—	—
鯉	30 貫	—	—	—	—

「家畜の頭数」

	大正14年	昭和3年	昭和45年	昭和59年	平成9年
肉牛	77 頭	40 頭	125 頭	251 頭	74 頭
馬	79 頭	12 頭	0 頭	0 頭	0 頭
豚	29 頭	1 頭	300 頭	100 頭	0 頭
にわとり	1 羽	1,735 羽	23,000 羽	0 羽	0 羽
乳牛	0	0	—	—	—

「土地のようす」をみると、下北手の農地は年々、へってきていることが分かります。それはどうしてでしょう。以前は秋田市の中心に近い^{のうち}ため住宅がたつようになったからです。最近、高速道路やそれにつながるアクセス道路がつくられたためです。

農作物の生産をみてもへっています。畑がへったからです。今では自分の家で食べる分しか作らなくなったからです。また、米以外の作物はほとんど生産されなくなりました。会社や役所、お店で働く人が多くなったことも大きな原因です。その中でも、最近ハウスでのメロンやほうれん草、食用菊^{さいばい}の栽培が増えてきています。自分の家で食べる分として作った野菜を直売所^{ちよくばいじょ}で売ること多くなってきました。

人口のうつりかわり

	男	女	合 計	世 帯
明治 4 年	8 9 3	8 2 2	1, 7 1 5	2 7 8
昭和 12 年	1, 1 6 7	1, 1 5 2	2, 3 1 9	3 4 9
昭和 5 年	1, 2 2 1	1, 1 8 1	2, 4 0 3	3 6 0
昭和 46 年	1, 9 1 7	2, 1 6 9	4, 0 8 6	9 2 9
昭和 55 年	1, 6 7 7	1, 7 7 8	3, 4 5 5	8 9 2
昭和 59 年	2, 2 8 6	2, 3 6 4	4, 6 5 0	1, 0 8 4
平成 10 年	2, 2 8 2	2, 1 0 4	4, 3 8 6	1, 3 7 6

(注)・昭和 4 6 年の人口には桜地区もふくまれているので人数が多い。

・昭和 5 9 年の人口は秋田市統計課の資料によるもので、一部桜地区までふくまれている。

児童数のうつりかわり

		昭 和 4 6 年							昭 和 6 0 年							平 成 1 0 年						
町 内		1年	2年	3年	4年	5年	6年	合 計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合 計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合 計
松 崎	男	2	3	4	4	0	2	15	0	0	1	3	5	3	12	1	4	4	1	2	3	15
	女	2	2	0	2	2	4	12	5	3	2	4	5	3	22	0	0	1	1	2	3	7
谷 崎	男	0	0	1	1	2	3	7	1	2	2	0	0	0	5	0	1	0	1	0	1	3
	女	1	1	2	1	1	1	7	2	1	0	0	1	1	5	0	0	1	3	0	0	4
柳 館	男	6	2	6	6	2	5	27	1	2	2	1	4	1	11	0	0	2	1	2	1	6
	女	2	1	5	5	5	6	24	1	2	3	0	3	4	13	1	4	3	2	5	2	17
宝 川	男	1	3	2	2	3	3	14	0	2	0	0	1	3	6	3	0	0	0	0	0	3
	女	3	1	0	3	1	2	10	2	5	2	1	3	0	13	0	1	2	0	1	0	4
通 沢	男	0	1	1	0	3	2	7	1	3	1	0	0	2	7	1	0	2	4	2	2	11
	女	2	0	2	0	0	4	8	1	0	3	2	3	2	11	0	0	1	0	0	1	2
寒 川	男	1	1	2	2	0	0	6	1	1	3	1	1	1	8	0	1	1	0	0	0	2
	女	2		1	1			5	0	0	2	2	0	0	4	2	0	0	0	3	1	6
梨 平	男	0	0	1	0	0	1	2	0	2	2	0	0	2	6	1	1	1	0	0	3	6
	女	0	1	2	1	0	1	5	3	0	1	2	0	1	7	1	0	0	0	0	1	2
黒 川	男	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	1	1	2
	女	1	0	2	2	0	1	3	1	0	1	0	0	0	2	1	1	1	0	1	1	5
緑が丘	男								3	4	9	6	3	1	26	3	3	1	0	1	2	10
	女								3	5	4	4	10	1	27	0	2	0	1	3	1	7
白 山	男								0	3	1	0	0	3	7	1	1	2	2	3	4	13
	女								0	1	1	1	1	1	5	2	0	3	1	2	5	13
県 住	男								9	8	8	3	7	1	36	3	4	7	4	3	2	23
	女								8	3	3	4	5	3	26	7	4	5	7	7	4	34
千秋の丘	男								12	9	14	4	8	9	56	4	1	3	3	11	8	30
	女								10	7	6	6	10	5	44	1	2	7	3	9	6	28
桜	男	1	0	2	2	0	1	6														
	女	2	4	1	2	4	4	17														
合 計		24	22	31	34	24	42	1 7 7	64	63	71	44	70	48	3 6 0	32	30	47	34	58	52	2 5 3

土地のようす

わたしたちの住んでいる下北手はどんなところにあるのでしょうか。秋田市全体から見ると東側にありますが、そのまわりは北は太平、西は広面、南は上北手、東は河^{かわ}辺^べ町^{せつ}に接^{せつ}していて東西に長く約8 km、南北は3.2 kmくらいあります。地^ち域^{いき}を3つに大きく分けてみると、東部に宝川、寒川、通沢、柳館、西部に松崎、千秋の丘、白山、県住、緑が丘の団地、南部に桜、黒川、梨平となります。

さて、土地のようすは東・北・南の方は丘^{おか}に^{かこ}囲まれ、やや高い東方の宝川の奥で100 mくらいの高さです。宝川は太平川の支^し流^{りゅう}で河^{かわ}辺^べ町^{せつ}との境、宝川字繁昌田および宝川字愛の沢^{みなもと}を源^{みなもと}にして東北に流れて宝川地域に達し、そこから西に向きを変え、柳館で寒川川と合わさり、さらに向きを南北にかえて桜の方へ流れて太平川に合流します。宝川と寒川川の流^{りゅう}域^{いき}は細長くせまい平地がひらけ、谷崎から西部にかけてようやく平地が広がります。

下北手全体としては、山林と田が多くなっています。

また、各地に多くのつつみがあり、北部の大堤、中央の赤平潟、西部の桜堤など、そのほか小さなものもいくつも見られます。

宝川の奥にあった宝川温泉は昭和の中ごろまではよく利用されていました。昭和60年ころには、そのあとが残っていましたが、今ではそのあともわからなくなっています。

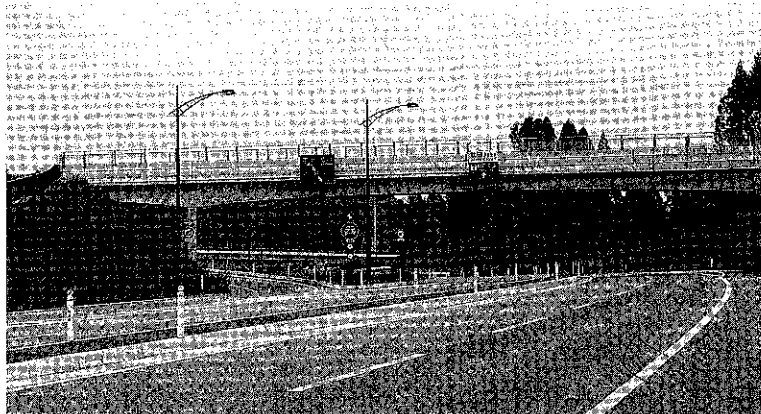
地域のほぼ中央を東西に結ぶ県道は河^{かわ}辺^べ町^{せつ}に通じています。上北手へ行くには黒川、梨平を通ると近く、太平には柳館から寒川を通して行き、明田方面には谷崎から桜、横森を通って行っていました。平成9年11月に下北手地区を南北に走る秋田自動車道が完成し、秋田駅東から中央インターチェンジに通じるアクセス道路も完成しました。この道路の完成で、下北手地区の交通のようすもだいぶ変わりました。学校の前の道路には、パルパスという地下道ができま

した。学校の横には、片側2車線の広いアクセス道路が走っています。秋田駅や明田方面に行くには、このアクセス道路を利用する人が多くなっています。

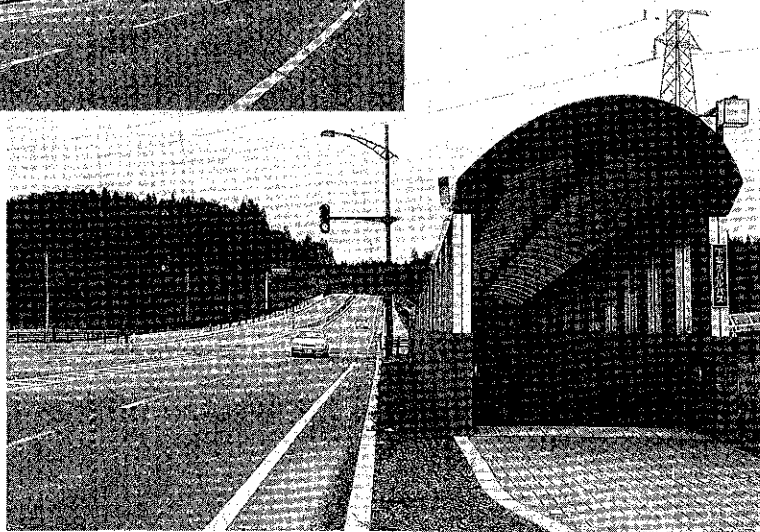
昭和29年9月に中央交通バスが宝川まで行くようになり、大変便利になりました。今では11往復^{おうふく}しています。また、秋田経済法科大学^たが建てられたり、千秋の丘や県営住宅、白山などの団地が建てられたりして、バス路線も増え、今では3つの路線に増えました。経法大線は、昭和58年から秋田市市営交通バスが運行するようになりました。

近年、学区内において、熊^{くま}が出没^{しゅつぼつ}する危険^{きけん}があるため、平成4年から、梨平・黒川行きのスクールバスを運行してもらっています。
(通称「熊バス」)^{つうしょう}

また、桜から横森へ行く道路のそばには団地が作られ、人口もどんどん増え、昭和59年に桜小学校、平成10年には桜中学校が開校しました。



←秋田自動車道と
アクセス道路



下北手パルパス→

お寺と神社



下北手の各地に、ところどころにお墓があります。みなさんも、お盆になると墓参りをすることでしょう。でも、お寺がないのはどうしてでしょうか。

むかし、桜村の宮が沢というところに万雄寺というお寺がありました。これが、佐竹公の家老、梅津家のお寺でした。この寺は、寛永八年（1631）梅津半右衛門忠国が、おとうさんがなくなったので建てたものです。このお寺の檀家の人々は、多く仁井田村に住んでいました。用事があるたびに遠くから来なければならなかったのが大変不便でした。

それで、明治25年（1892）に、ほかの場所にお寺を移してしまったのです。それ以来、下北手には、お寺がなくなってしまったといわれています。

社名	所在地	ご神体
しんめいしゃ 神明社	桜字宮が沢	大名持命、少彦名命
しらやま 白山社	松崎字家の前	白山姫命
神明社	寒川字五関	天照大神
くまの 熊野神社	通沢字内山	イザナギ・イザナミの命
熊野神社	柳館字前田面	イザナギ・イザナミの命
あたご 愛宕神社	柳館字赤平	カグツチの命
はちまん 八幡神社	寒川字寒川	応神天皇
神明社	梨平字梨平	天照天皇
八幡神社	通沢字内山	応神天皇
神明社	通沢字山田沢	天照天皇
神明社	黒川字黒川	天照天皇・応神天皇
うけもち 保食神社	宝川字堂が下	宇賀魂命
神明社	宝川字潤が崎	天照大神

民間に伝わる薬草

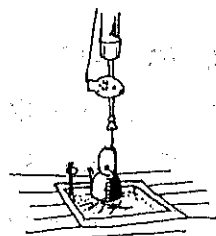


むかし、医学が発達していなかったころは、お医者さんも少なく交通も不便でしたので、少しくらいの病気やけがは、薬草でなおしていたのです。

それではどんなものがあったのでしょうか。この中には、今でも使っているものがあるかもしれませんね。

薬 草	効 能
ゲンノショウコ	暑気あたり、下痢、胃腸病
オオバコ	百日咳、下痢、消化不良
フクジュソウ	心臓病
ヨモギ	神経痛、腰痛、風呂に入れると暖まる
ドクダミ	下剤、駆虫薬
タンポポ	健胃、強壮剤
アサガオノタネ	下剤
アジサイ	解熱剤
ワラビ	毒虫のかみ傷をちらす
トチノキ	胃病、打ち傷、解熱剤
クルミ	回虫駆除
スイバ（スカンポ）	解熱剤
フキ	ぜんそく、毒消し
ハスの葉	歯痛止め
ウド	頭痛、めまい

下北手に伝わる伝説



●松崎

むかし、谷内佐渡に^{とうぞう}藤蔵という人が住んでいました。

広面部落の^{たんぼ}田圃に水を引こうとし、大沢田に貯水池を^{きず}築こうとして、殿様からお金を借りて^{じぎょう}事業にかかりましたが、ついに失敗して^{しけい}死刑になりました。その人のことを記念して、町内に「藤蔵堤」という地名があります。

●桜谷地

守沢堤土手下に「^{つるのゆ}鶴の湯」という温泉があって、大正九年ころまでは^{とうじ}湯治場として栄えていました。

むかし、^{あし}脚をいためた一羽の鶴が、堤の土手下の湧き水のところに飛んできました。二・三日、そのお湯に脚をひたしていると傷がすっかり^{なお}治って、やがて、元気に飛び去りました。

それ以来、^{いらい}土地の人々が「鶴の湯」とよぶようになったということです。



平成10年10月

学習発表会

●黒川

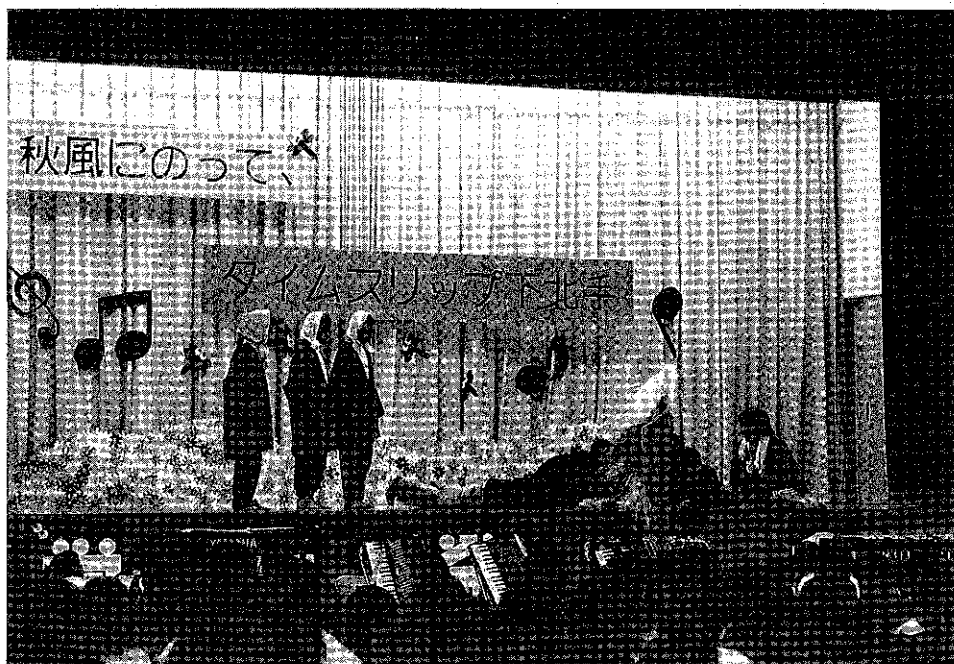
今から数百年前に殿様が住んでいました。そのお姫さまがある時、重い病気にかかり死んでしまいました。殿様は大そう悲しまれ、そのお墓^{はか}の中にたくさんの宝物や首飾り^{くびかざ}、お金などを入れてやりました。そのお墓は、村の東の方、四百メートルくらいのところにありました。そこは、今から数十年前までは村の共同墓地^{きょうどうぼち}になっていたところです。

ある時、村の若者二人が、むかしのお姫さまの宝物を掘り出そうとこっそり出かけましたが、いくら掘ってみても何も出てなかったということです。

●宝川

大むかし、下北手のあたりに、毎日毎日雨が降らなかったの各地の川はすっかり水がなくなり、飲^のみ水がなくて人々が死んでしまいそうになったことがありました。

ところが、この村を流れる小川は、清水がこんこんと湧き出て少しも枯れることはありませんでした。そのため、各地の人々はここに集まり、ようやく命を救^{すく}うことができました。そこで、この小川のことを「宝^{たから}の川^{かわ}」とよび、やがて、「宝川」という村の名前になりました。



●寒川

むかし、佐竹の殿様が秋田にやってきたころ、前から住んでいた豪族たちは、すきあれば佐竹氏をたおそうと思っていました。

そのころ、太平の目長崎に舞鶴館を築いていた、永井太平守右近将監広治もその一人でした。かれは、館の前の山にたくさんの軍勢を集め、先頭に立って戦いましたが、とうてい、佐竹公に勝つことはできません。それで、山を越えて逃げてしまいました。それで、この山のことを「去坂峠」ということになりました。

さて、その戦いに敗れたため、数百人が佐竹公の捕虜になりました。この中には目長崎や寒川の百姓たちがたくさん入っていたのです。佐竹公は、この捕虜を八橋の刑場につれていこうとしましたが、あまり多くの人数であったので新しく、寒川の鉾台山の奥沢に刑場をつくりました。

そして、ここで数百人の捕虜をみな殺しにしてしまいました。その後になって、殺された人々のゆうれいが毎晩毎晩出てきて、村の人たちをおびやかすので、夜も眠ることができなくなりました。そこで村の人たちは、これではとても落ち着いて暮らすことができないと、みんなで相談し、佐竹の殿様にお願いして死んだ人たちをなぐさめるお堂を建て、ていねいに祭りました。この土地のことを今では、首切沢・堂が沢・覆面沢などとよんでいます。

それからしばらくして、この地蔵様を去坂峠に移したといわれています。



● 桜

今から八百年くらい前に平氏の武将といわれた八森氏が部落にやってきました。そして、この土地を治めて一族をおき、財産に恵まれて大そう栄えました。

その八森氏の庭に桜の木が七、八本ありました。

ところが、八森氏もそのうちに滅んでしまい、一族の人々も切りざりばらばらになってしまいました。

それで、木場恭助氏の先祖が、その桜の木のめんどろをみながその枝を切って売り、生計をたてていました。そのうち、木場家の先祖も死んで、だれも桜の木の世話をしてくれる人がいなくなり、ついにみんな枯れてしまいました。

そのころから、この村のことを「桜」というようになったそうです。



● 柳 館

むかし、梨平に気だてのやさしい、きれいな娘がいました。孝行でよく働くので通沢にもらわれていきました。よく働き、田畑の仕事もいっしょうけんめいするし、夫の両親にもよく仕えたのですが、たった一つ機おりの仕事だけは、いくらていねいにやってもしゅうとめさんから気に入ってもらうことができません。それなら、いろいろ教えてくれればいいものを、ちっとも教えてくれなかったのです。

お嫁さんは、いくら頼んでも聞いてくれないものですから、その悲しい気持ちを実家の両親に聞いてもらえば、いくらか気も晴れることだろうと寒川へ行きました。しかし、娘の話を聞いてはくれるのですが、両親は、「お前のつくしかたがたりないからなので、いっしょうけんめいに努力して、機おりも上手になりなさい。」というだけです。

娘は、しかたなく悲しい気持ちのまま、また通沢に帰って行くのでした。でも、やっぱり前と同じなのです。何度もこんなことをくり返していましたが、ある日、とうとう、しゅうとめから、「このような娘は、とてもこの家に置いておくわけにはいかないので実家に帰ってくれ。」といわれてしまいました。

娘は泣き泣き、嫁入りの時に持ってきた機おりの道具を背負いながら梨平へ帰ってきたのです。両親は大そう悲しみましたが、「もう一度しゅうとめさんにあやまってくるように」と、家には置いてくれませんでした。

さあ、どうしたらよいのでしょうか。実家の両親は通沢へ帰れというし、しゅうとめからは実家へ行くように言われるし、あれこれ考えてみてもよい考えが思いうかびません。そうしているうちに夕方になり、日暮れも近くなってきました。娘は悲しくなっていっそ死んでしまおうと思いました。

娘は一人で人通りのない、暗い山道を通沢の方へと歩き始めました。そのうち、赤平瀉のほとりに出ました。この悲しい気持ちをだれかに聞いてもらいたい、どうしても、このまま死んでしまうのは心残りです。でも、まわりには、人っ子ひとり見当たりません。ぼんやりとした月明かりだけが瀉の水面を静かに照らし、あたりはしいんとしていました。

赤
平
瀉



かた 瀧のほとりに一本のクスの木がありました。娘はいつの間にかクスの木の葉をちぎりながらぼんやりしていました。そして、

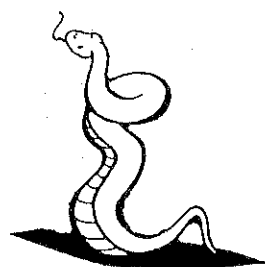
「わたしが死んだ後に、村人たちがこのクスの葉のちぎられているのを見たら、きっとわたしの気持ちをくみとってくれることだろう。もうこれで思い残すことはない。」とひと思いに、ざんぶとばかりに瀧にとび込んでしまいました。

あくる日、通りかかった村人が、機おり道具を見つけ、大騒ぎになりましたが、今さらどうにもなりません。両親も、まさか死んでしまうほど思い詰めていたとは知らず、娘の心があわれで、悲しくてたまりませんでした。

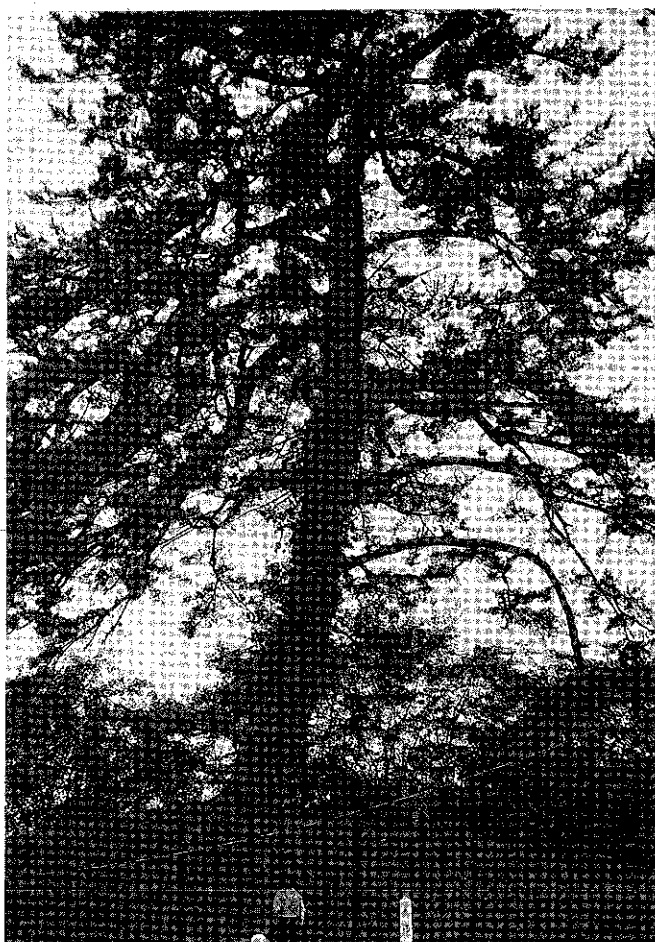
娘は、とうとう、瀧の主となってしまうのです。そして、瀧のほとりにあるクスの木だけは、ほかのクスの木の葉とちがって細かくきざみがいっているのだといわれています。きっと、あわれな娘の気持ちをいつまでも語り伝えようとしているのでしょう。

ところが、しばらくして、はちろうがた 八郎瀧の主であった八郎太郎が、おぼうさんにすがたを かえて、ここへやってきました。そして、瀧のすぐそばにある山本孫四郎さんの家に一泊し、赤平瀧の底深く住み数か月して帰る時にまた一泊しました。その晩、八郎太郎は家の人「決してわたしの寝姿を見てはいけない」とかたく言ったのすが、家の人はどうとうがまんしきれなくなって見てしまいました。ところが、そこには、大きなへびがいて座敷の奥から土間にまで長くなっていました。

そのため、八郎太郎は二度とこなくなってしまうましたが、そのことがあってから山本家はだんだんふるわなくなってしまうそうです。



その家のそばにある大きな松の木の枝が、みんなた 垂れ下がっているのは、八郎太郎が休むときに松の木にからだを巻いたからだだろうといわれています。



保
存
樹（賀川瀉の下）



保存樹の向かいの山本家
（最初の校舎跡）

学校のうつりかわり

学校がはじまる前に、柳館に佐々木金蔵という人が塾を開き、天保3年（1832）から安政6年（1859）まで近所の子どもたちに勉強を教えていたといわれています。

さて学校のはじめとしては明治8年（1875）5月24日、柳館村字賀川湯ノ下にある山本孫四郎さんの家を1か月1円50銭で借りて柳館学校をつくりました。学校の印として木綿で作った旗に校名を書いて旗竿にかかげていました。先生は貝塚清豊という人で月給4円。生徒数は30名あまりで授業料は月にひとり5銭でした。

次の明治9年になって生徒の数もふえたので、この年の11月に柳館村字前田面にある進藤東重吉さんの家を借りて移りました。生徒数50名です。

さらに明治14年（1881）になると生徒数70名となり今までの家がせまくなったので25円かけて2階造りの教室を建てました。しかし、生徒数が90名になったので明治16年（1883）に20円出して2階に教室を加えました。

そのうち明治22年（1889）に柳館簡易小学校となり初代校長に大越国光先生がなられました。明治25年になって校舎がどうしてもせまくなり、3月に桜谷地に新しい学校を建て下北手村立尋常小学校と名前をかえました。このころの通学路のうち黒川・梨平は山を越えてのどろ道でとてもひどかったと書かれています。生徒数は男89名、女3名で卒業生は男10名でした。

ところが生徒数は明治32年（1899）になって170名を超え、校舎は古くなってどうしても新しく学校を建てなければならなくなり、一つは下北手村字谷崎に移り下北手東尋常小学校といい、男110名女79名で3学級に分け、もう一つは下北手大字桜小字蛭沢に下北手西尋常小学校をつくり生徒は50名くらいでした。学

年は4年生までで1学級ずつでした。桜・梨平・黒川が通学区^{く い き}域です。つまり下北手小学校が東と西に分かれたのです。

明治39年(1906)7月1日、第1回児童学芸会を開き^{えんそう}演奏35回行い、お客さんは114名でした。これまでは小学校が4年までしかありませんでしたが明治41年(1908)から6年制となり、教科として次のようなものがありました。^{しゅうしん}修身・^{さん}国語・^{じゅつ}算術・^{れきし}日本歴史・^{ちり}地理・^{しり}理科・^{しやうか}図画・^{そう}唱歌・^{さいほう}体操・裁縫(女児)となっています。

学級^{へんせい}編制と児童数

第1学級	第1学年	男 2 6	女 1 7	計 4 3 名
	第2学年	1 6	2 1	3 7
第2学級	第3学年	2 3	1 4	3 7
	第4学年	2 0	1 2	3 2
第3学級	第5学年	1 6	4	2 0
	第6学年	1 2	1	1 3

上記のうち、卒業児童は男11名、女1名計12名で^{しゅうぎやうねんげん}修業年限6か年の第1回卒業生です。

○大正2年(1913)9月26日、東西両小学校の連合運動会が大塚台で開かれました。

○大正4年(1915)8月31日、校庭で活動写真会を開いたところ雨天ではあったが、下北手村で初めてのことであったので、500人以上も集まりました。

○大正6年(1917)5月23日、河辺郡小学校連合運動会を四ツ小屋で開き、4年以上が参加しました。

○大正7年(1918)11月16日、職員児童の^{りゅうこうせい}流行性感冒患者^{かんぼうかんじゃ}がたくさん出たので^{しゅつこうていし}出校停止にしました。

○大正12年(1923)4月に東西両校が^{がっぺい}合併して下北手尋常高等小学校となりました。このころ尋常科だけで男182名、女163名合計345名となったのです。

○大正13年(1924)5月24日、開校50周年記念祝賀会が

行われました。

○大正14年(1925)5月27日、下北手少年赤十字団^{はっだん}発団式が行われました。

○大正15年(1926)9月27日、初めて電灯がつけました。

○昭和2年(1927)5月6日、柳館字前田面に運動場^{もうちう}を設けました。すなわち今の地域センターができる前が運動場になっていて、その年の3月3日から5日までの3日間、毎日午前9時から午後3時まで各町内ごとに日を定めて働きました。出席者は全部で262名で、お礼としてひとりに10銭あたりの品物をやりました。

○昭和4年5月9日、午後2時ころ桜部落に火事があり17戸が焼けました。

○10月21日、新しい(山の校舎)学校ができたので、谷崎から移ってきました。

○昭和5年5月27日、健康優良児^{けんこうゆうりょうじ}として6年生玉尾長一郎・鈴木幸子が東京朝日新聞社から表彰^{ひょうしょう}されました。

○昭和6年に学校でこんなことを決めています。

(1) 学級では標準語^{ひょうじゅんご}を使うこと。

(2) 相手^{あいて}を呼ぶときは、必ず、くんやさんをつけること。

(3) 3学期には1日おきに朗読会^{ろうどく}をすること。

きっと、みんなのことばづかいが、あまりよくなかったのかもかもしれませんね。

○昭和9年7月28日、前の晩から降^ふった雨が1日中、やまなくて川の水があふれ、学校に来られなくなったので休みにしました。

○8月30日、同窓会でピアノを買ってくれました。東京から届きました。

○昭和10年2月9日、校歌ができました。

○4月10日、24名の児童が秋田放送局で午後6時から唱歌とハーモニカを放送しました。

○昭和13年7月23日午後2時から二宮尊徳翁^{にのみやそんとくおう}の銅像除幕式^{どうざうじょまくしき}をし

ました。

○昭和15年5月31日、桜の苗木^{なまぎ}95本を運動場のまわりに植えました。

○昭和16年4月1日、秋田県河辺郡下北手村立下北手国民学校と名前をかえました。

○10月22日、二宮尊徳翁の銅像を供出して石像ととりかえました。(これが前のものです。)

○昭和18年7月14日、このころ毎日暑い日が続いて井戸水^{いど}がすっかりかれて、のみ水にこまってしまうました。

○昭和19年10月3日、校門を建てました。

○昭和20年5月23日、全校児童が山菜^{さんさい}とりにでかけました。わらびが300kg、ぜんまい30kg。

○昭和27年10月30日、図書室、放送室整備^{かんりょう}が完了しました。

○昭和29年9月23日、創立^{そうりつ}80周年記念式典を行いました。

○10月1日、秋田市に合併^{がっぺい}して秋田市立下北手小学校となりました。

○昭和31年7月2日、ベルタイマーをとりつけました。

○昭和32年9月10日、シーソー、ブランコ、すべり台、遊動橋^{ゆうどうきょう}などをPTAでとりつけました。

○昭和33年6月19日、グラウンドの回りにプラタナス50本を植えました。

○10月2日、牛乳給食を始めました。

○昭和34年6月28日、幼児学級を始めました。

○11月15日、ボーイスカウト秋田県14団下北手少年隊結団式^{けつだんしき}をしました。

○昭和35年1月29日、上水道完成。

○昭和35年11月15日、創立85周年記念校内放送設備^{せつび かんりょう}完了。

(24万円)

○11月18日、健康教育優良校として記念の楯^{たて}と銅製花瓶^{どうせい かびん}をもらいました。

- 昭和36年3月12日、ヤマハG2型ピアノが寄付^{きふ}されました。
- 昭和37年9月10日、今のような給食になりました。
- 昭和39年8月9日、校庭に低鉄棒がとりつけられました。
- 10月28日、校章をきざんだものを玄関と体操場の正面にとりつけました。
- 昭和40年9月5日、水源^{すいげん}タンクが完成しました。
- 11月5日、創立90周年を行い中庭の観^{かん}察^{さつ}園^{えん}、国旗掲揚^{こっき けいようとう}塔^{とう}、校旗などがつくられました。
- 昭和42年11月10日、ごみをやく釜^{かま}ができました。
- 昭和45年6月22日、学校の坂道が全部舗^ほ装^{そう}されました。
- 昭和45年11月14日、嵯峨^{さあや}要^{よう}が健康優良児秋田県代表として表彰されました。
- 昭和46年11月16日、校門のところに電灯がつけました。
- 昭和47年2月26日、「きょうど下北手」を発行しました。
- 昭和50年、プールができたので、全校で水泳検定をやりました。
- 昭和50年9月28日、100周年記念式典を行いました。
- 昭和53年、秋田市教育委員会から道徳教育研究校として指定され、昭和54年には秋田県と文部省からも指定をうけて研究しました。
- 昭和55年、道徳教育の公開をしました。
- 昭和56年3月29日、現校舎が新築落成し移転完了しました。
- 昭和56年11月19日、校舎改築落成記念式典を行いました。



旧校舎への坂道

- 昭和57年，下北手スキー場が作られました。
- 昭和58年，クマが出て，集団下校をはじめました。
- 昭和59年3月23日，二宮尊徳翁の銅像除幕式を行いました。
- 昭和60年，110周年記念式典を行いました。
- 昭和60年12月20日，「きょうど下北手」を発行しました。
- 昭和60年，校舎の増築^{ぞうちく}が完了しました。
- 平成元年（1989），秋田市制百周年の記念植樹をしました。（桜）
- 平成3年，新プールが完成しました。
- 平成5年，文部省，県，市教委からエイズ教育（性教育）の研究委嘱を受けました。（3か年）
- 平成5年，体育館を増築しました。
- 平成5年，コンピュータが導入されました。
- 平成7年5月20日，創立120周年記念式典を行いました。
- 10月24日，エイズ教育（性教育）の公開研究会を開催しました。
- 平成8年，秋田県健康推進学校（中規模の部）表彰・全日本健康推進学校中央審査秋田県代表になりました。

むかしの勉強の内容

明治20年（1887）に小学校の学科について次のように決められています。

第1条 小学校の学年は4月1日から翌年3月31日までの1年間とする。

第2条 小学校の始業時間を次のようにする。

4月1日から6月30日までと9月1日から9月30日まで
では午前8時

7月1日から8月31日までは午前7時

10月1日から3月31日までは午前9時とする

第3条 休業日は次のようにする。

日曜日、土曜日の午後、夏休み8月7日から8月31日。

冬休み12月25日から1月24日まで、その他

第11条 小学校では各学年ごとに5月、7月、10月、12月、2月の5回、それまでにあった教科の小試験を行って成績順について考え学年末（3月）に、その1年間にあった教科について大試験を行い、及第落第を決めること。

第12条 試験は各教科百点満点とする。

第14条 大試験の点数の決め方は小試験の平均点と合わせて総合の平均を出す。

第15条 大試験の成績が60点以上とったものを及第とする。けれども1つの教科でも20点以下のものがあれば落第である。

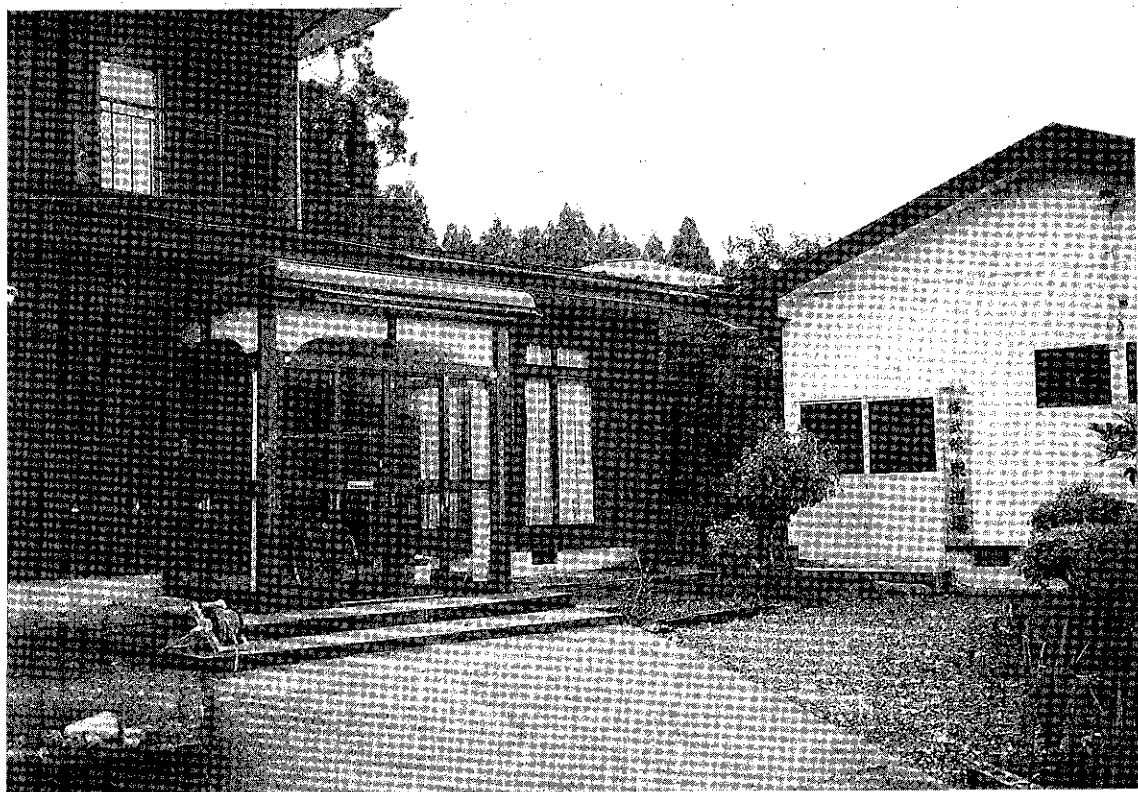
第17条 大試験各教科の問題数は次のとおり。

尋常小学校（4年生）

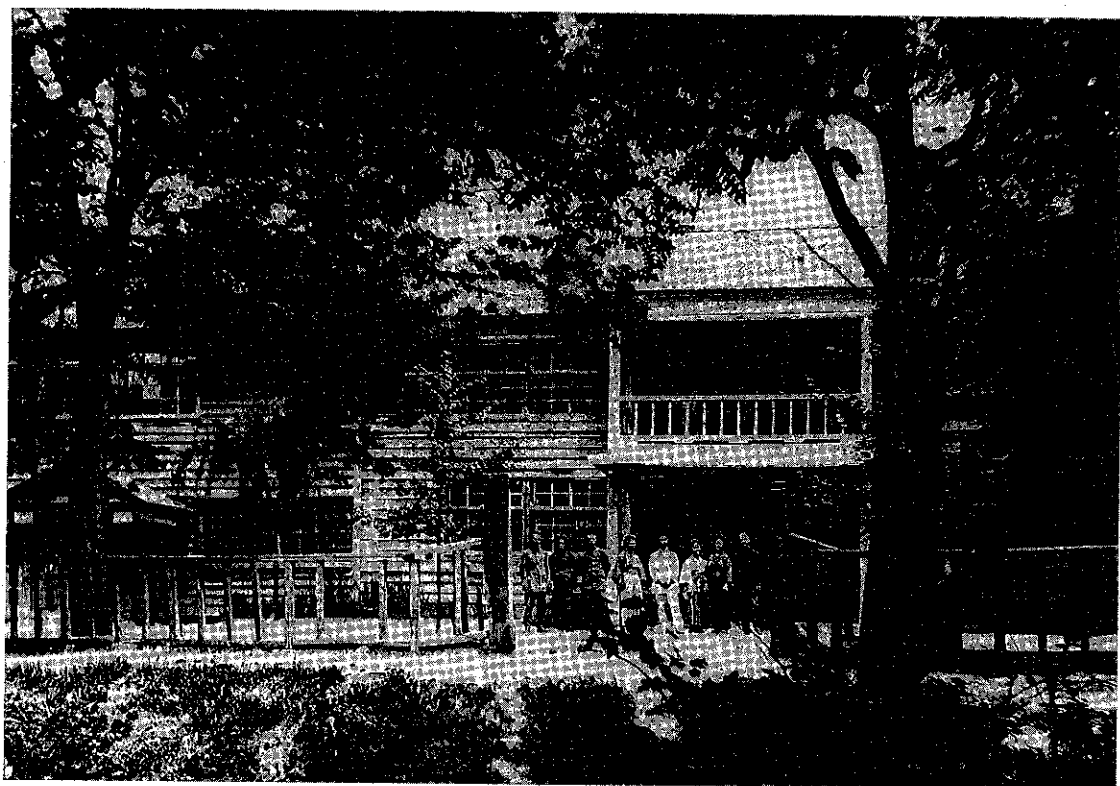
	第1年	2年	3年	4年
修身	1題（作法も）	同じ	同じ	同じ
読書	およそ5行	7行	同じ	同じ
作文	2題	同じ	同じ	同じ
習字	4字	6字	8字	同じ
算術	4題	同じ	同じ	同じ
図画	なし	なし	1図	同じ
唱歌	1曲	同じ	同じ	同じ
体操	なし	なし	1演習	同じ

今まで勉強のことについて書きましたが、^{がくせきば}学籍簿第1号というのを開いてみますと1番になっている人は明治12年（1879）12月7日生まれで松崎の嵯峨市之助さんという人です。この人は明治21年（1888）4月に入学し26年3月に卒業しています。（この当時は小学校は4年制です。）そして沿革誌^{えんかくし}にのっている第1回目^{えんかくし}の卒業生は男10名と書かれています。

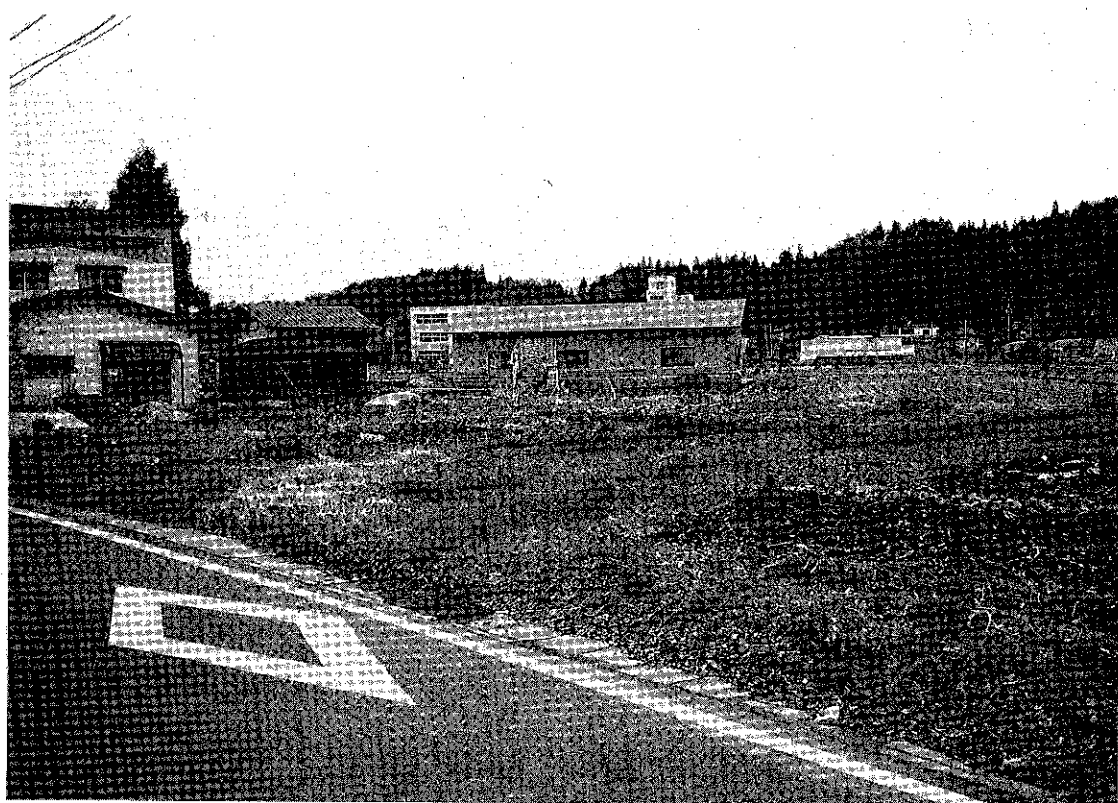
そして女の人で最初に入学、卒業したのは学籍簿23番の黒川の飯塚リサさんで明治15年（1882）10月20日生まれて明治27年（1894）3月に卒業しました。リサさんが入学したのは柳館村字前田面53番地にあった進藤東重吉さんの家ですが翌年、明治24年（1891）3月下北手村大字桜小字桜谷地に新しく学校を建て、下北手村立尋常小学校と名前をかえました。学校までの道路はおよそどろ道が多いが、とくに黒川梨平の子どもたちは山を越えてこなければならず、たいへんなんぎをしました。それで黒川梨平からは学校にはいる人が少なかったといわれています。



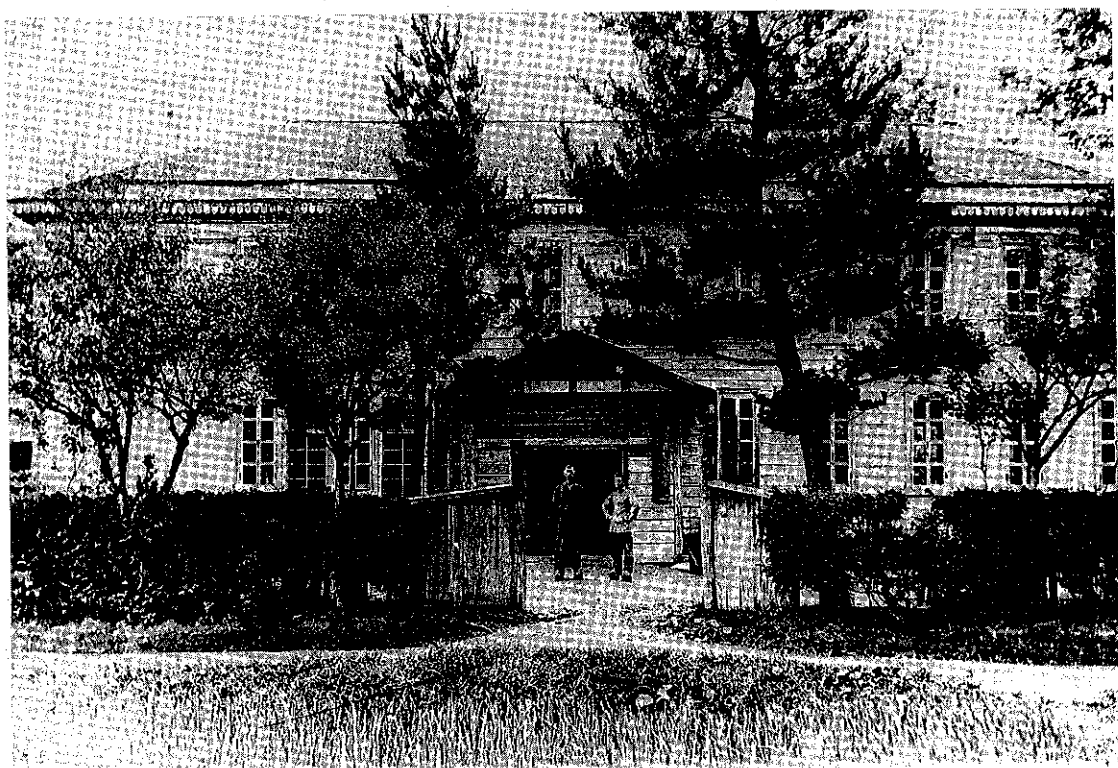
旧校舎跡（前田面）



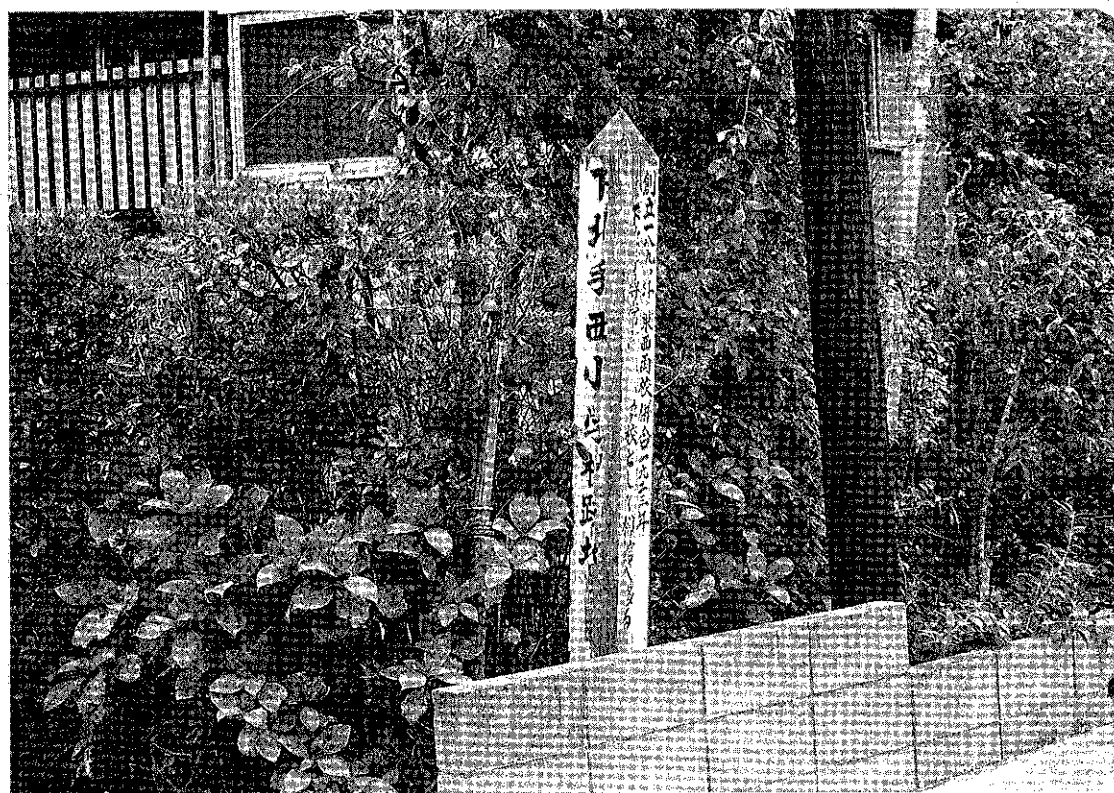
下北手東尋常小学校



東小学校跡（谷崎）



下北手西尋常小学校



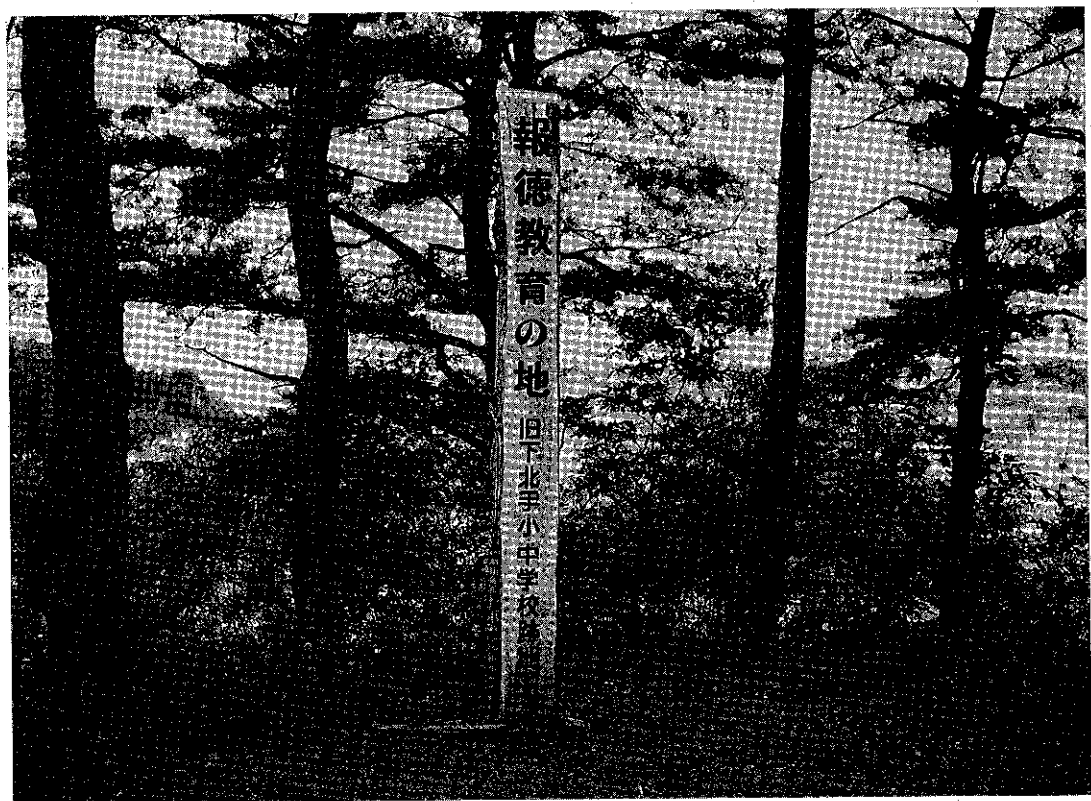
西小学校跡（横森）

空から見た下北手小学校 (1)



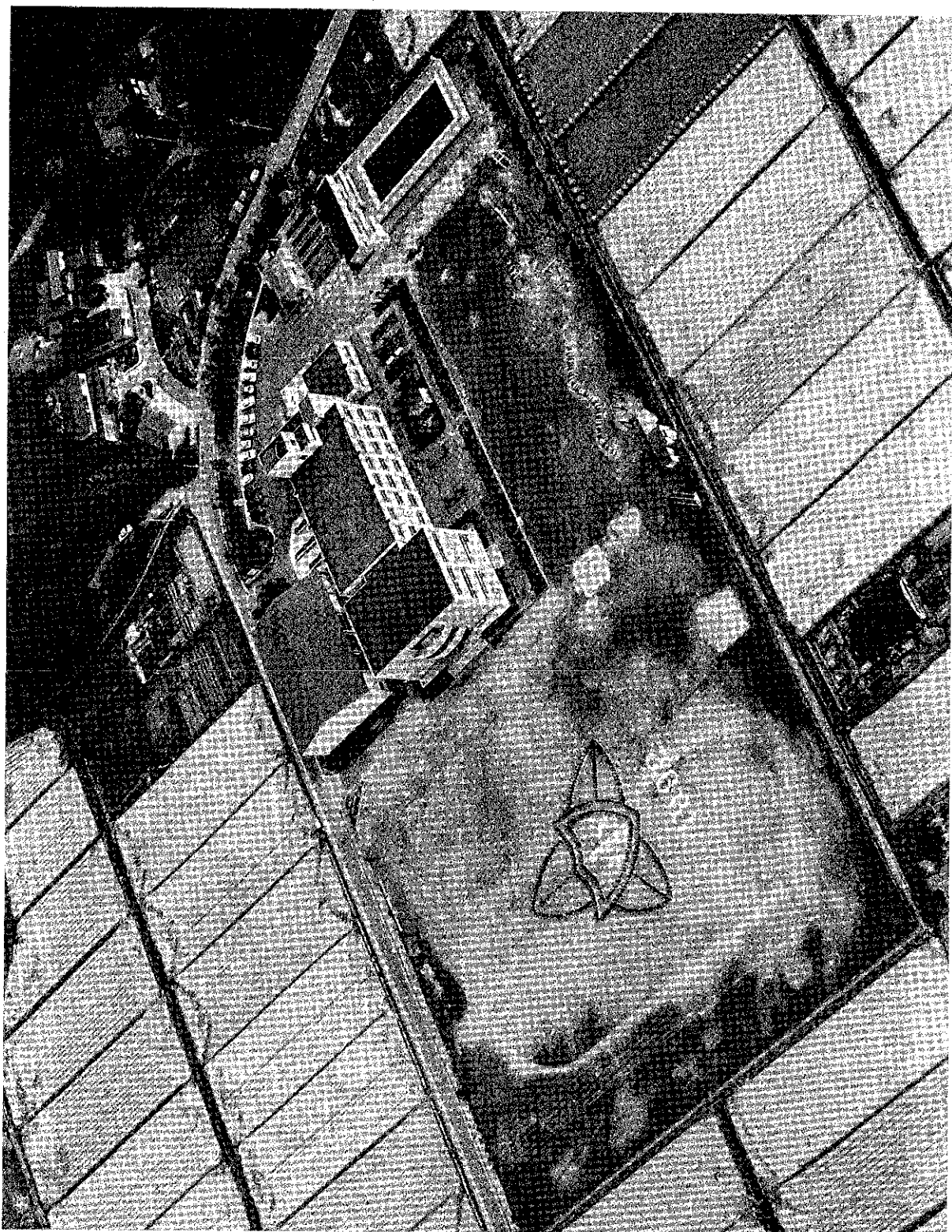


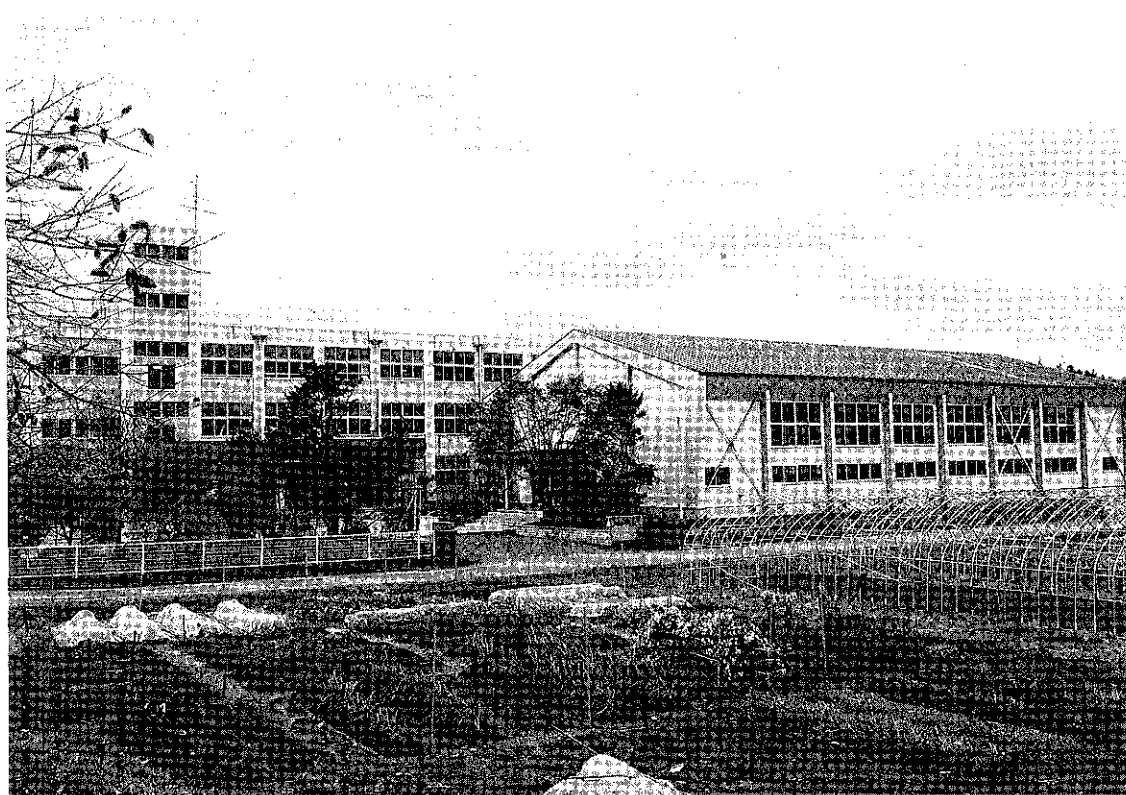
旧校舎全景



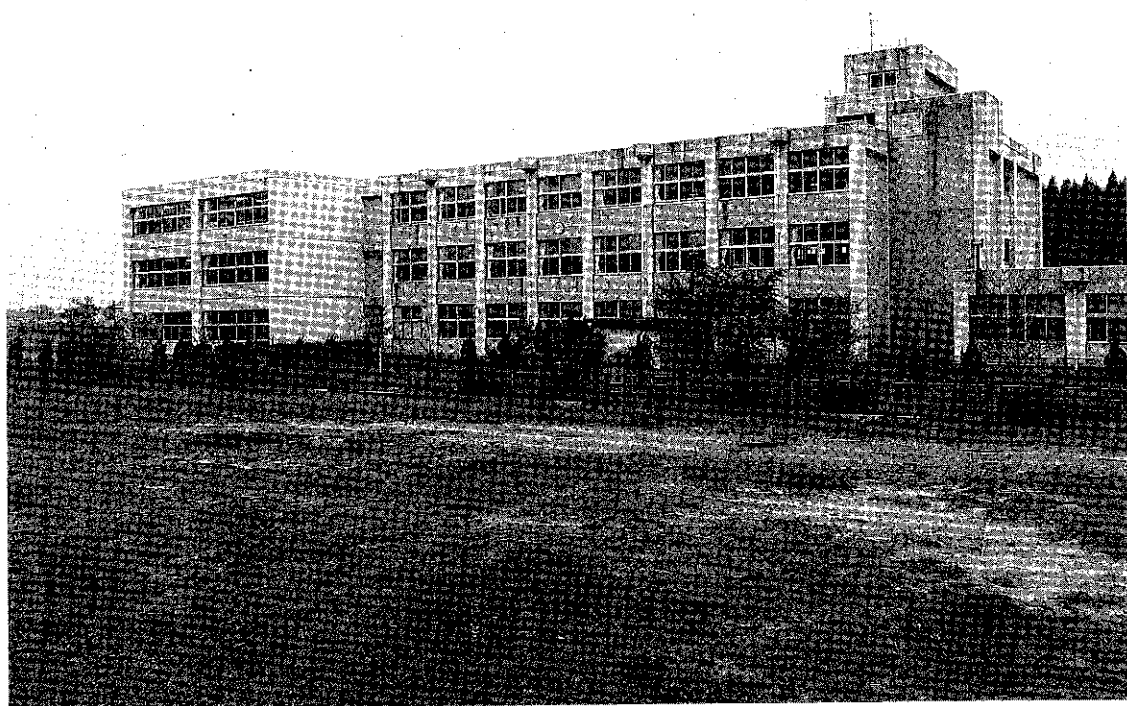
旧校舎跡地

空から見た下北手小学校 (2)





新校舎全景（前庭より）

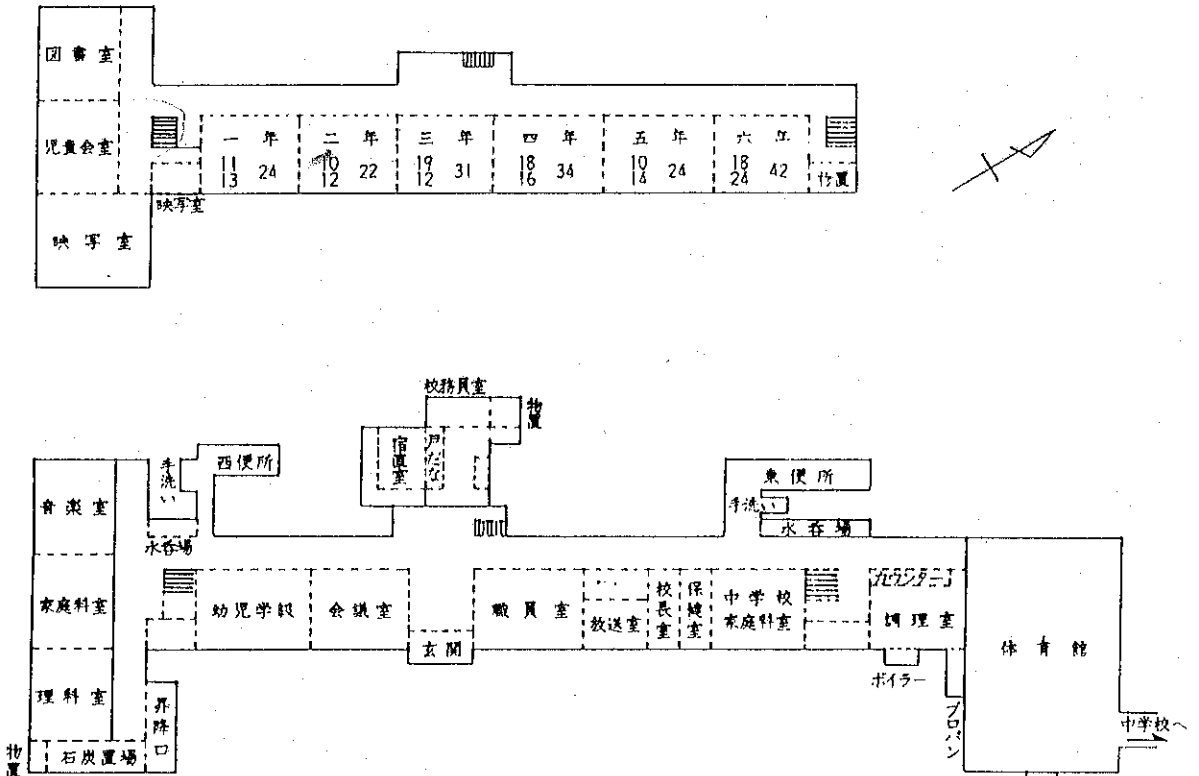


新校舎全景（グラウンド側より）

旧校舍平面図

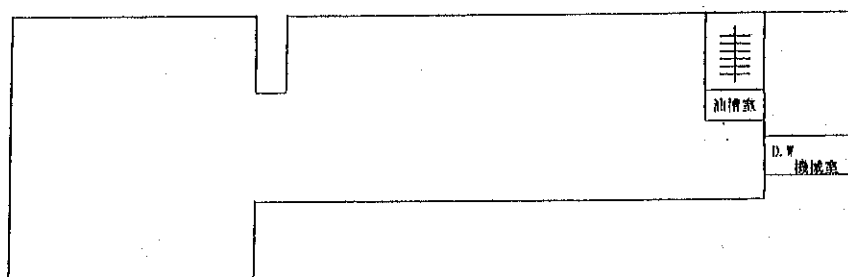
秋田市立下北手小学校

昭和47年 1月現在

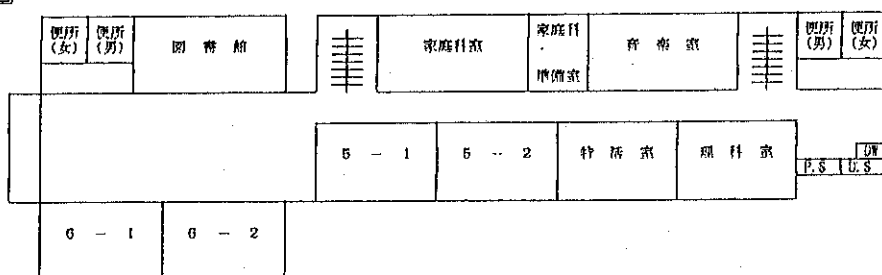


職員室

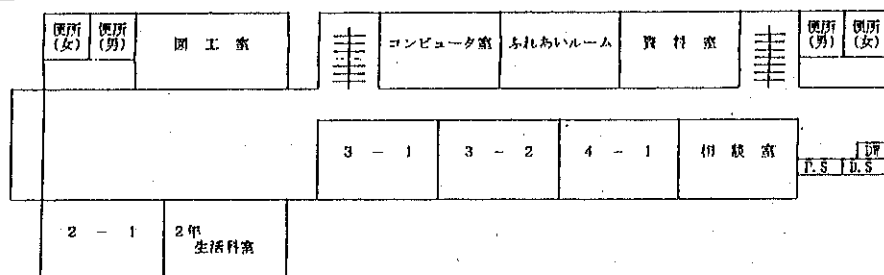
上 歷



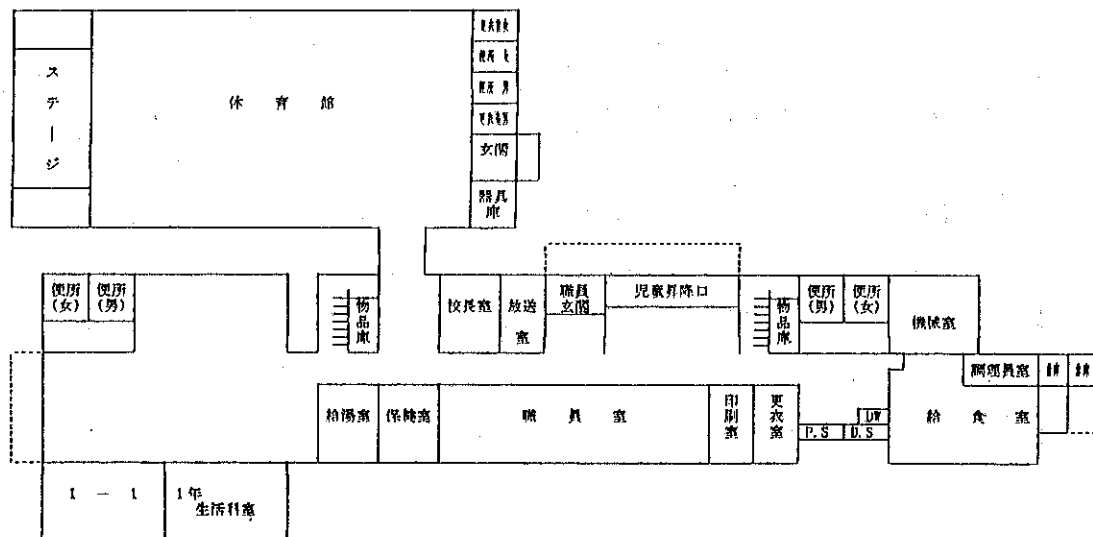
3 品牌



2 附

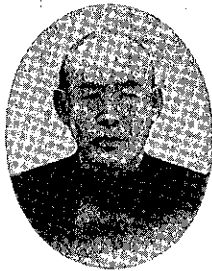


1 155



歴 代 校 長

初代校長



現校長



代 氏 名 在任年月 年数 (年, 月)

1 大 越 国 光 明 22・7～26・7 (4, 1)

2 川 崎 亀 雄 26・8～37・3 (10, 7)

(32年, 児童数がふえたことと, 校舎を新しく建てたことにより, 33年から東尋常小学校と西尋常小学校に分かれました。)

3 黒 沢 秀太郎 37・4～38・3 (1, 0)

4 栗 田 兵 馬 38・4～39・3 (1, 0)

5 今 野 長 蔵 39・4～41・3 (2, 0)

6 荒 木 房 治 41・4～44・6 (3, 3)

7 東 忠之輔 44・7～45・1 (0, 7)

8 陶 観 光 45・2～大4・3 (3, 1)

9 田 中 節 三 大4・4～ 6・9 (2, 6)

10 佐 藤 菊 治 6・10～ 9・3 (2, 6) ※

村 立 下 北 手 西 尋 常 小 学 校

1 高 瀬 吉太郎 明33・11～40・7 (6, 9)

2 滝 下 久 治 40・7～41・3 (0, 9)

3 伊 藤 房之助 41・4～42・9 (1, 6)

4 小 畑 豊 吉 42・10～43・3 (0, 6)

5 井 上 正 友 43・4～44・9 (1, 6)

6 鈴 木 健一郎 44・10～45・4 (0, 7)

7 鎌 田 財 橘 45・5～大3・3 (2, 11)

8	樋	渡	通	喜	大	3・4～	4・3	(1, 0)
9	佐	藤	菊	治		4・4～	6・10	(1, 7)
10	小	川	準	治		6・10～	9・2	(2, 5)
11	今	野	長	蔵		9・3～	11・3	(2, 0)
12	中	野	栄	吉	11	・4～	12・3	(1, 0)

※11 土 岐 藤 蔵 大 9・4～15・9 (6, 6)

(大正12年4月、東西両小学校を合併し、下北手尋常高等
小学校と改^{かいしょう}称しました。)

12	根	岸	勇	大	15・10～	昭2・2	(0, 5)
13	佐	藤	菊	治	昭	2・3～	3・9 (1, 7)
14	小	田	島	留	吉	3・9～	26・3 (22, 7)
15	田	原	福	次郎		26・4～	27・3 (1, 0)
16	長	崎	守	正		27・4～	30・3 (3, 0)
17	河	先	賢	蔵		30・4～	35・3 (5, 0)
18	島	田	守			35・4～	37・3 (2, 0)
19	早	坂	啓	治		37・4～	39・3 (2, 0)
20	小	西	三	治		39・4～	42・3 (3, 0)
21	鈴	木	正	雄		42・4～	44・3 (2, 0)
22	長	谷	川	義	男	44・4～	49・3 (5, 0)
23	野	尻		滋		49・4～	51・3 (2, 0)
24	鑑		秀	夫		51・4～	53・3 (2, 0)
25	本	田		尚		53・4～	56・3 (3, 0)
26	伊	藤	範	英		56・4～	59・3 (3, 0)
27	伊	東	武	雄		59・4～	62・3 (3, 0)
28	佐	藤	富	勝		62・4～	63・3 (1, 0)
29	清	澤	龍	雄		63・4～	平3・3 (3, 0)
30	大	山	秀	二	平	3・4～	7・3 (4, 0)
31	鎌	田	義	雄		7・4～	9・3 (2, 0)
32	三	浦	憲	子		9・4～	現在

小学校時代の思い出（１）

私が一年生じんじょうになって入学したのは大正二年（１９１３）四月一日で下北手東尋常高等小学校（校舎は谷崎にあった）です。受持の先生は八島キヨ先生で背が高く年配のりっぱなかたでした。教え方もずいぶんきびしく、物覚えものおぼが悪いと手をつねられ、忘れ物があると叱しかられ、みんなびくびくしたものです。

私が小学校のころは、今のような服はだれも着ていません。みんな、かすりの着物に、おびをむすんで、ぞうりをはいていったものです。たまに、げたをはいて来るものもありましたが、学校までの道路が、とても、せまくて、ひどかったものですから、めんどろくさくなると、ハダシで歩いて行って、学校の前のせきの所で、足をちょっと水につけて、はいて行ったものです。

冬になると、着物にはおりを着て、首まきをまくくらいで、ぼうしなどありませんでした。

カバンもありませんから、道具はフロシキにつつま、にぎり飯をぶら下げて歩きました。学校にはいると、始まりのカネになるまで遊んだものです。カネといっても、つりがねを小使いさんが木槌でたたいて知らせるのです。

さて、勉強が始まりますと、先生のお話をきくのですが、いたずらすると、きつく叱られたものでした。書くものは石盤せきばんと石筆せきひつですから、ならったことをノートに書きとめておくのとはちがって、よくおぼえられません。えんぴつやノートを使い始めたのは三年生になってからだと思います。

図画なども、えのぐを使ったのは四年からで、ねだんが高かったものですから、とても、だいじにして使いました。

音楽は、唱歌しょうかといってオルガンで習いました。今のみなさんは、いろいろな楽器や、楽譜がくふをすらすらやれて、たいへんうらやましいですが、そのころは歌うことだけでした。

体そうは着物を着てやりましたよ。今から思えばなんだかへんな

かっこうですね。運動会では、走るのと、ゆうぎと、しょう害物競走などがありました。

そのころは、まだ電燈^{でんとう}がありませんから、どこの家でもランプでした。もちろん、ラジオもテレビも水道もなかったんです。

そうじのときの水も井戸水を使いました。冬でも教室には、六十センチ四方^{くら}くらいの火ばちが先生のそばに一つあるきりですから、今と比べると、はるかに寒かったですが、休み時間になると、みんな元気に遊んだものですから、そんなにもつらくなかったです。それに、そうじ^{へいき}なんかも、水でやるのですが、いつも家でやっていましたから平気でした。

家に帰ると仕事の手伝いをしたり、みんな、よく働いたものです。

当時の校長先生は陶観光^{すえ かんこう}先生で、ひげを八の字にはやし、度の強いめがね^ど越しに見られると、自分ばかりを見つめられているようで、とてもこわかったものです。

また校長先生が作られた村歌^{そんか}は次のようなものですが、いつも国歌を歌う式のあとに必ず歌ったものです。

日本海にそそぎいる	太平川を境 ^{さかい} して
河 ^{かわ} 辺 ^べ 郡 ^{ごおり} の北の隅	これぞわが村下北手
部落の数は	八つありて
黒川寒川宝川	松崎桜に柳館
梨平それに通沢	(以下略)

二年受持 永井源一郎先生

三年受持 柴田 常司先生

四年受持 荒沢文次郎先生（結婚後加賀谷姓）

五年受持 小野 忠先生

この先生は質問されたら必ず手を挙げなければならないことになっていました。ある時、指名^{しめい}されたひとりが、何だかわからないが、ハイと立って、

「それは、その、なぜかというと、わたしわかりません。」

とおおわら
と答えたので、みんな大笑いでしたが、先生だけはちっとも笑いませんでした。

六年受持　大塚　定彬先生

下北手小学校の校歌を作られた歌人で春声ごうと号し柴田先生と共に下北手の出身の教育者です。

私は大正八年（1919）の三月二十八日の第二十七回目の卒業生で三十四名の中、十一名が女でした。しかも高等科に進学したのは、わずか十二名（女一名）しかおりませんでした。

なぜこんなに少なかったのでしょうか。それは、農家の手助けをするか、職人しよくにんの弟子入りするしかなかったからです。だれもがもっと教育を受けたい気持ちでしいはあったのですが、農業の手不足をおぎなったり、家庭の経済けいざいを助けるためであり、ほんとうになんぎなものでした。そのころの日本は、あまり豊ゆたかな国ではなかったのです。

先生や、先輩せんぱいたちは卒業してからも、私たちを教育してくれました。修養会しゅうようかいを開き、農村の青年として、よき社会人となるように、農村の発展はってんと共に、平和で豊かな幸福な農村げんせつを建設するようにはげましてくれました。

また、神社がっしゆくに合宿、先生、先輩を囲み、「農村発展の道」についてとうろん討論したものです。ご飯を食べるときも神様をおがみ世の中に感謝かんし、そして、

一、品の多少ろんを論ずるなかれ

一、味の濃淡のうたんを問うなかれ

とみんなで言う前から「いただきます」といったものです。私は今でも、ゆめと希望を持って先生先輩の教えを守り、社会のためにつくしたいと思っています。

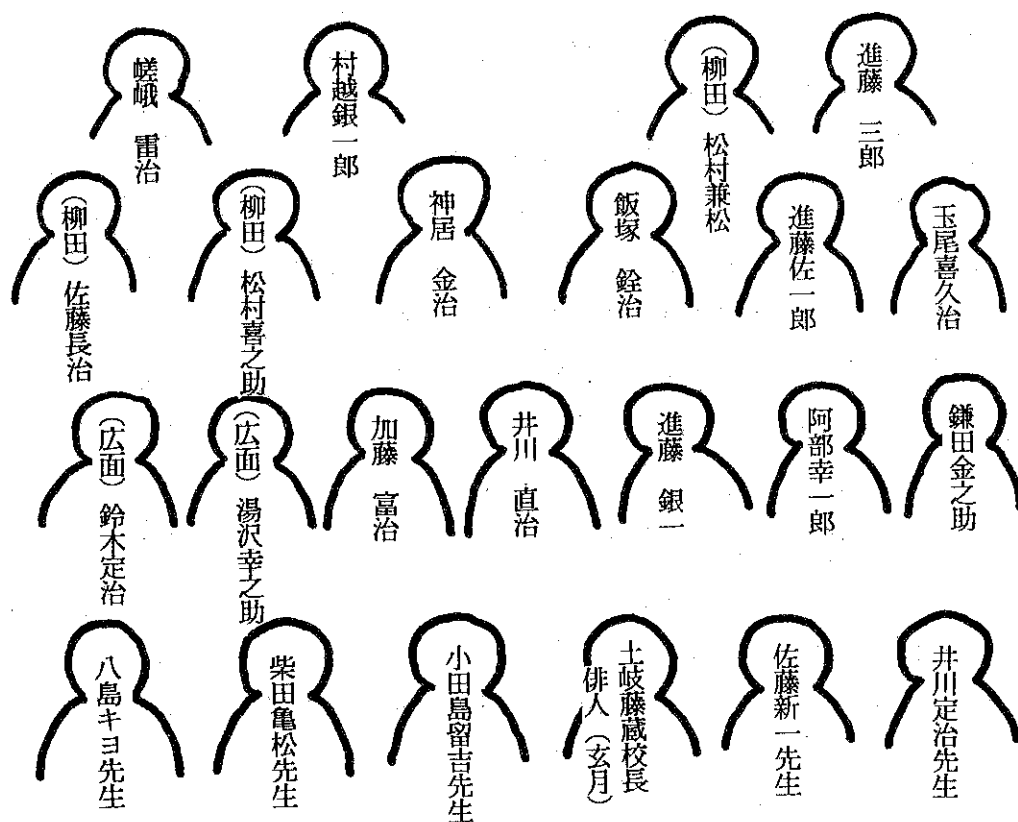
ふるさと
故郷から眺める大地も大空も無限むげんにひろがっています。この故郷に囲まれた自然の中にすべての人々と助け合いながら、みんなと共にえいきゅう永久に幸福に暮らしていきたいものと願っています。

谷崎　進　藤　佐一郎

（明治39年生）



大正十一年三月二十八日高等科卒業写真



小学校時代の思い出（２）

小学校時代の思い出と言われても60年近くも前のことで、今では記憶も^{うす}薄れてしまいました。

私たちが河辺郡下北手村立尋常小学校に入学したのは、昭和2年4月で谷崎の今では畑となっているところの校舎で、同級生は63名でひとつの教室に、びっしり詰まって勉強しました。入り口は、体操場のところと東側の2か所で、正面には玄関があり、2階造りで校庭には大きなけやきの木がたくさんあり、その木に登ったりかくれかくれて楽しく遊び、鐘の合図で勉強が始まる。教室では63名の生徒が身動きできないほどでひとつの机と長いいすに男女がならんで座り、あまりにも生徒が多いのでかくれていたずらをして先生がわからないので男の子は女の子のノートに落書きをしたり、髪を引っ張ったりしてよく泣かせたものです。そのようなことをくり返す毎日でしたが、それは子供の遊びの一部で、そのことで親たちが介^{かいにゅう}入していじめたとか非行などとさわぐことなく、次の日になれば楽しい仲間として自由にのびのびと遊んだものです。3年生の時、山の上に建てられた新しい学校へ移りました。最初見たときはあまりにも立派で大きいので驚きました。中はきれいで体操場も大きく、教^{きょうだん}壇があり、そのまた正面には御真影の飾られる所があり、祝日には先生は礼服で生徒は袴^{はかま}や羽織を着て出校し、校長先生は青白い手袋をして御真影を拝み、君が代を2回歌い、それから校長先生は教育勅語^{きょういくちよくご}を奉読^{ほうどく}され、祝日の歌を合唱し式が終わるのです。教育勅語について各方面で論議されておりますが、私の思い出として部分的に書いてみたいと思います。

教育ニ関スル勅語 前の部分を略し「爾^{ナン}臣^ジ民^{ミン}父母ニ孝^{ケイ}兄弟ニ友^{テイ}ニ夫婦^{アイフ}相和^{ホウ}シ朋友^{ホウユウ}相信^{アイ}シ恭^{キョウ}檢己^{ウケン}レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能^{チノウ}ヲ啓発^{ケイハツ}シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ広メ世務ヲ聞キ国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ……」今でも全文は忘れることなく記憶しております。

緑ヶ丘の学校を建てたころ村の財政も各農家の生活も苦しい時でしたが、当時の村長村越市之助さんは、学校教育の重要なことを力説され、自分の土地と村長の給料を教育のために使われ、良い校舎に良い先生を呼び教育の村と言われるようになったことを聞かされ、私達は下北手に生まれたことを誇りに思いました。当時の家庭生活は貧しく、着物は洗濯をするにも着替えも少なく同じ着物を毎日着て学校へ行きました。道路が悪く曲がりくねった道で、荷車の跡には稲わらや笹をしいたり、雨が降ると下駄を履いて歩くことができなく裸足で下駄を持って通い、入り口で足を洗って入ったものです。そのような時代でしたからシラミがおり、少し天気の良い日は授業中這い出してくるので、みんなでシラミ取りをやったこともあります。だが、学校はきれいで大事にしなければならないので、掃除には水を使わず各自が米糠袋を家から持ってきて、みんなで一列になって根気よく床を磨いたもので、今では生きた教育であったように感じます。

また、先生にも優しい先生と怖い先生がおり、授業中は手からむちを離さず持っていて、少しでも態度の悪い生徒や勉強のわからない時は容赦なく打たれ、そのむちも先生の言いつけで山から取ってきたもので、自分が打たれるという不思議な気がしました。教えるのが上手で面白かったのは小田島先生の歴史の時間でした。先生はその人物になったような素振りで授業をされるので何時間でもよいと思ったものです。当時の先生は神様のようなもので、オシッコもしない偉い人と信じ、誰のことよりも先生の言うことは守らなければならないことでした。

学校から帰ると、隣り近所の友達が集まり手作りの遊び道具を作るため、山から木を切ってきては木刀を作り、竹馬を作り、自由に野や山を走り回り、木の実を採り、夏は山いちご、秋には山ぶどうや栗の実を採る季節となれば、大きい生徒が先頭になり1本の縄にしがみつき、小さな子供がはぐれないように一団となって山へ出かけたものです。農家では、農作業のため子供の世話は子供同士で見

なければならぬので、みんなで注意して良く遊びました。夕方になれば腹がへって、お母さんから焼けこげたご飯に塩をつけたおにぎりをもらって^{たくあんづけ}沢庵漬で食べた味は今でも忘れません。その時はなによりも^{おいしい}美味い^{もそう}ご馳走でした。今は有り余るほどなんでも口にすることができて幸せな時代だと思います。私達の子供の頃は、家で作ったもの以外は何もなく、おやつには^{ばれいし}馬鈴薯を塩で煮たものを食べたものです。

冬休みの思い出は、宿題があまりないので、毎日のようにミゴ縄をない、それを売って飴くじを引くのが楽しみで一生懸命やり、飴屋で1等や2等のくじを当てると、そのくじをそっとかくし次にまたそのくじを出して1等の飴をもらったり^{いたず}徒らをしたことや縄を売ったお金で帳面やマンガの本を買いに石川書店まで歩いていったり買ってきた本は貸し合って読んだり、自分の働きで得たお金を自由に使えた喜びは何とも言われない満足でした。

神 居 勝 嗣

(昭和7年卒業生)



小学校時代の思い出（３）

下北手小学校入学から卒業まで、60年前を^{かえり}顧みての記憶を記述したいと思います。同級生は70人ぐらいだったと思います。昭和13年4月に下北手尋常小学校に入学し、途中大東亜戦争のため下北手国民小学校となり、服装も国民服一色となりました。昭和20年8月15日敗戦後、終戦により厳しい社会環境の中卒業し、人生の第一歩の出発となったのです。

小学校までの通学

今のようなりっぱな舗装ではなく、凸凹の砂利道^{じやりみち}で夏はほこりが立ち、冬は寒さと積雪が多く、ブルドーザーでの除雪はなく、一集団で上級生が先頭に立ち、雪の中をこいで「かきわけ」の登校でした。

勉学と活動

文部省指定の教科書による指導も、大東亜戦争により戦時一色となり教育方針の指導も変わり根幹が一変した教育となったのです。国民1億人あげての戦争勝利の時代へと突入したのです。家庭での勉強はこれがため、経済的余裕は勿論、食料増産^{もちろん}に励み、家に帰ると勉強どころか春には田植え、秋には稲刈りと手伝いが待っていました。学校に登校すると、体操場に集合し朝礼、校長先生の講話、訓辞と続けました。長いため途中で倒れる人は必ず2～3人がでたものですが、これも栄養不足からだと思います。特に冬は厳しく、校長先生のお話は長く、今のようにはわかりやすいお話だといいいのですが、当時は低学年にはほとんど理解することが容易でなかったと思います。学校は高台にあり、夏は涼しく、冬は寒く、ストーブがなによりもこいしく暖かく、しかしその薪切りも夏場に高学年が山の現地からの運搬で大変な労働でした。

飲料水

現在のように上水道で蛇口を回すと水が流れるのではなく、井戸は学校正面に向かって、右と左の2箇所にも木枠で囲まれ、確か深さは30メートルはあったと思います。この井戸はつるべでの汲み上げで、夏は冷たくて、運動競技の後の水の欲しさから行列をなし、つるべで汲み上げた桶に口をつけて一気に飲んだおいしさは、格別おいしく思ったものです。また、冬は暖かく校内掃除にも本当に恵まれました。

スポーツ

昔は運動競技は、軍人教育訓練が主でした。しかし、生徒には年1回の大運動会競技の応援合戦がなつかしく思い出されます。また、川辺郡競技大会も年1回、仁井田小学校グラウンドで行われ、我が下北手チームも参加したのですが、何分長い道を歩いてからの競技で現地到着には疲れが出始め上位入賞は至難^{しなん}の業^{わざ}でした。

終 戦

昭和20年8月15日の敗戦による終結に当たり、天皇陛下の玉音放送のため全職員、生徒が体操場に集合し聞きましたが、当時のラジオの音量が聞き取りにくく、低学年には泣いている先生の姿を理解することができなくて不思議に思ったことでしょう。

まとめとして

昭和の不景気時代に入學し、昭和16年の大東亜戦争勃発^{ぼっぼつ}、そして終戦、このような時代の中を経ての勉学は、誠に厳しいものでありました。楽しいことも多く、みんな一生懸命頑張ったのです。また、お教えを頂いた先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

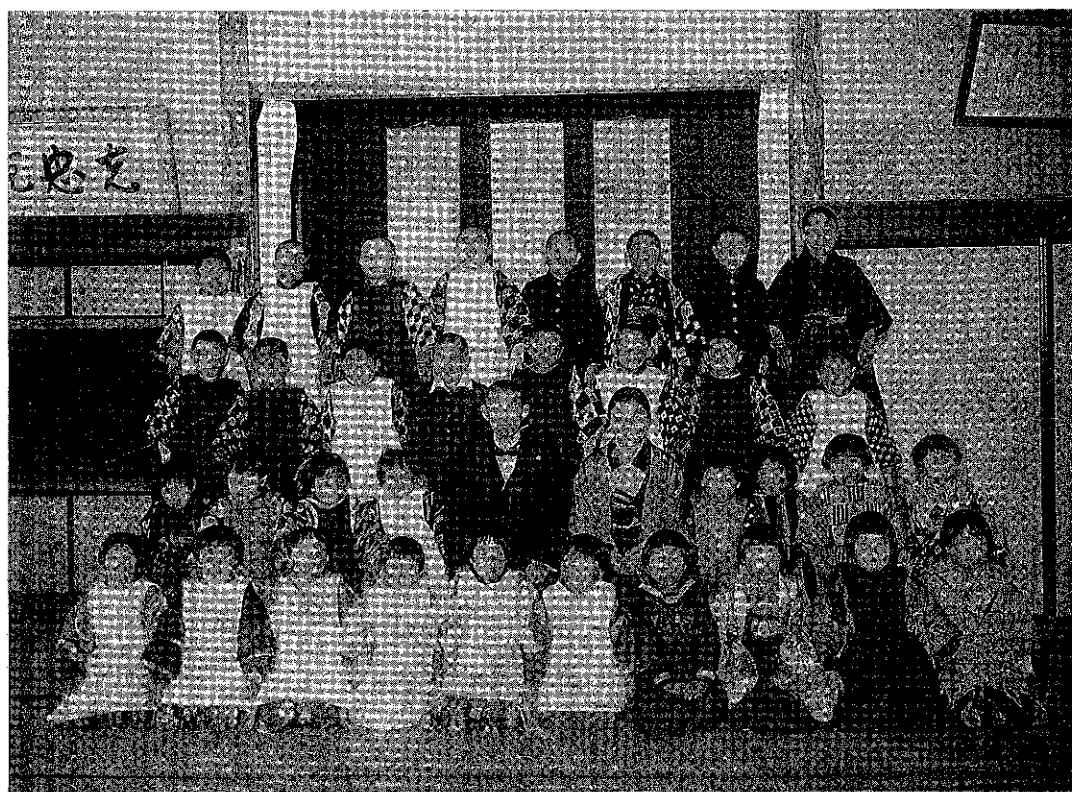
私は常に次の言葉を心に言い聞かせています。みなさんも実行し

てみてください。

1. 健全なる精神は健全なる身体に宿る。
2. 不言実行 —— 生きるに値する人生の開拓を

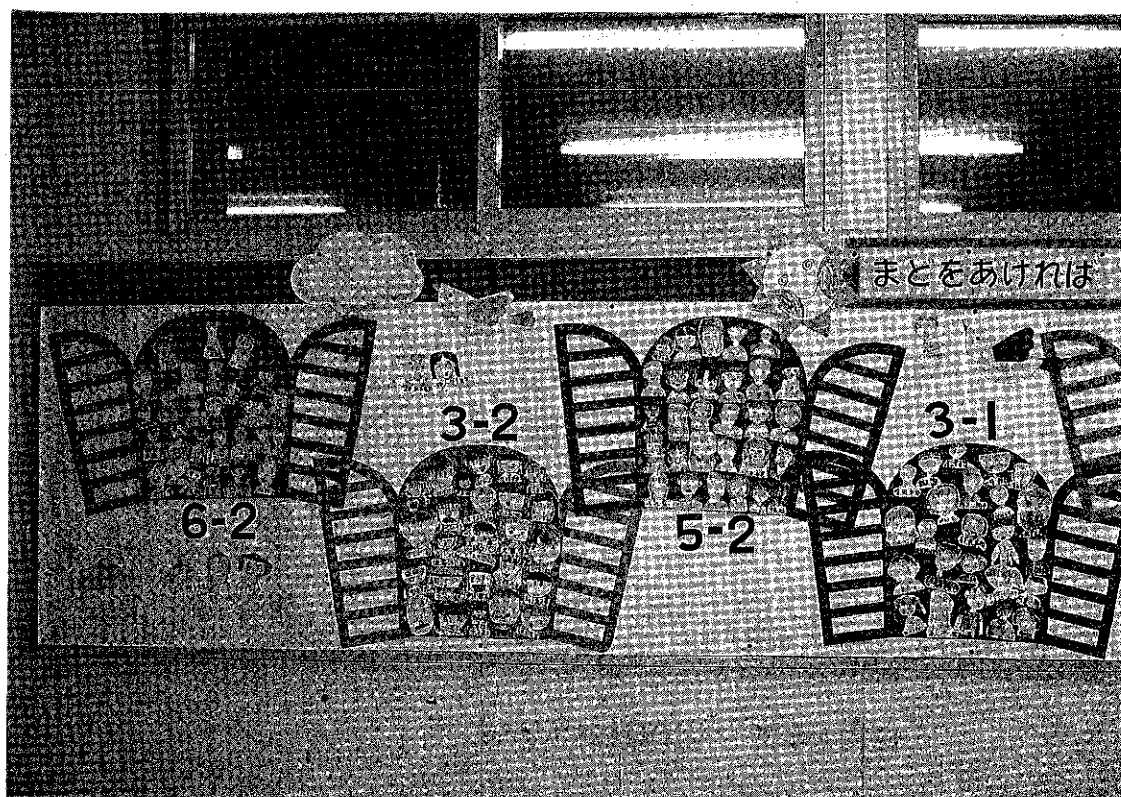
昭和7年2月20日生

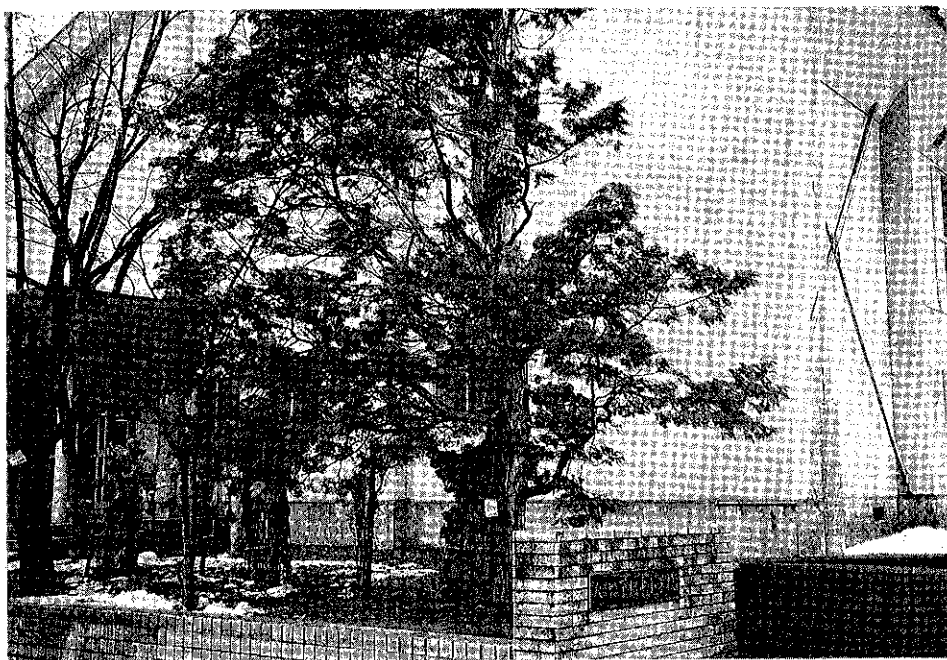
井 川 武 敏



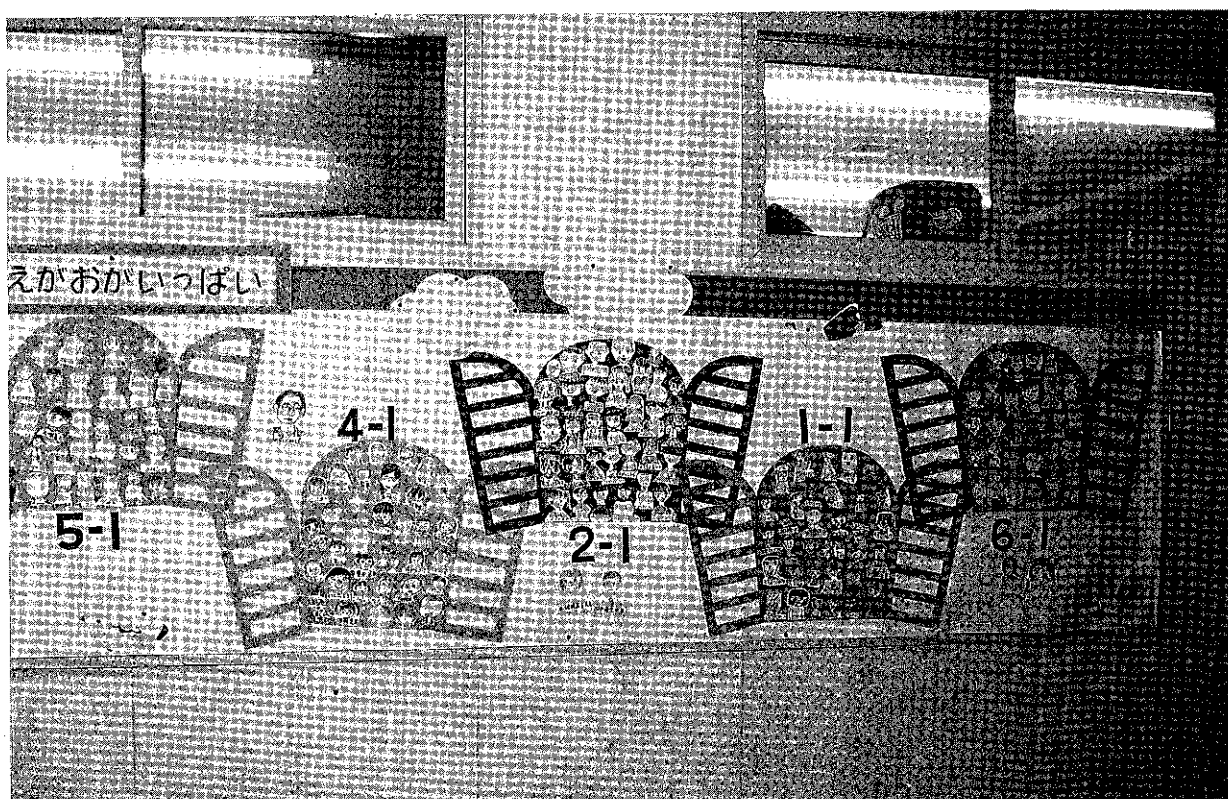
昭和14年 小学校第2学年

タイムスリップ 下北手





あすなろの木



全校児童の似顔絵

下北手小学校校歌

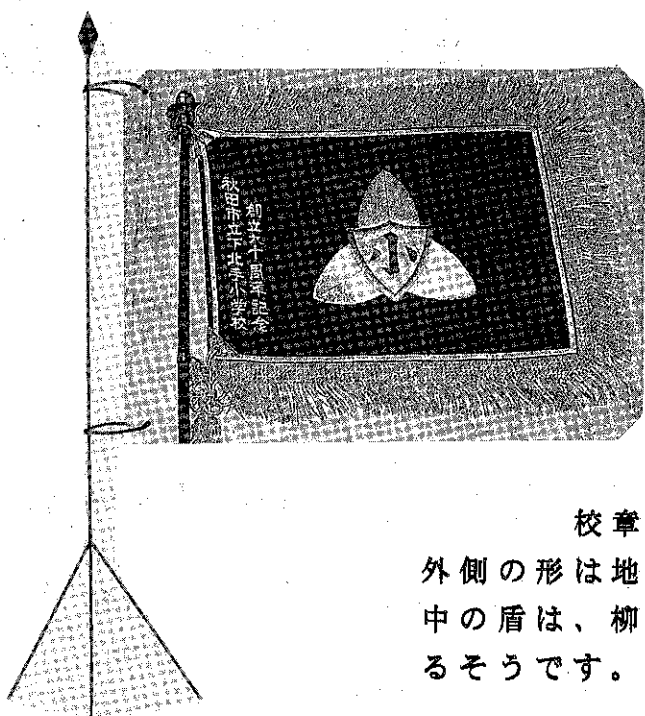
大塚 定彬 作詞
小松平五郎 作曲



下北手小学校校歌

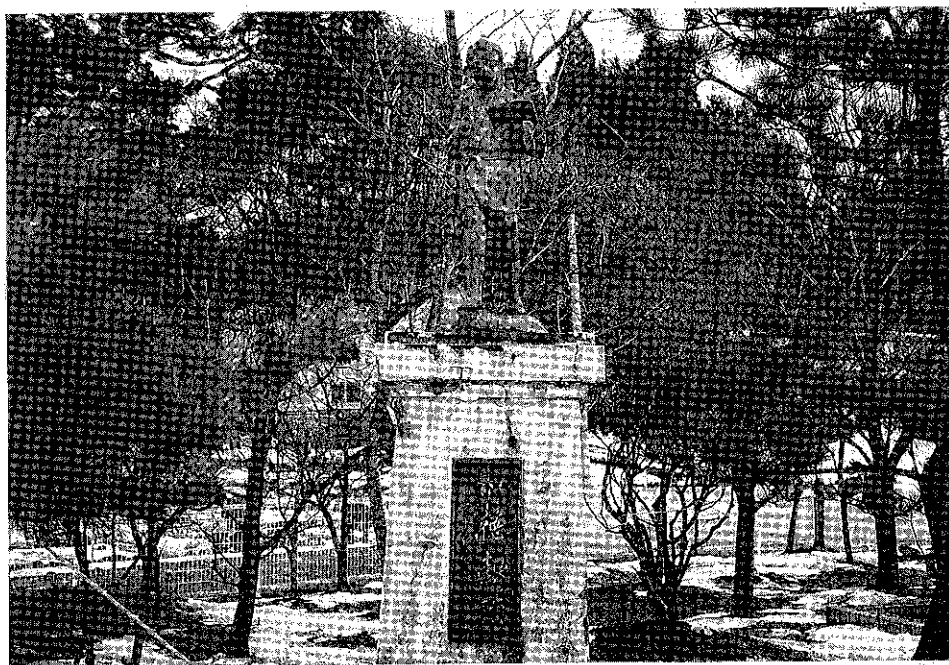
大塚 定彬 作詞
小松平五郎 作曲

- 一、柳の館の片ほとり緑が岡の学びやに
教草摘み日に月に伸び行く若き子等をみよ
- 二、仰げば太平巍峨として高き望みを示しつつ
飛ぶ白雲をふところに大空衝きて聳え立つ
- 三、宝川辺の美し田に鉄の力も隈も無く
実る瑞穂の豊けくも琥珀を鳴らし波を打つ
- 四、我が村人をはぐくみてここに年経し学びやの
歴史どうとび共々に輝きとわに有らしめん
- 五、理想の村を築くもの我等を描きて誰がある
想えば使命いや重し奮い励まんいざやいざ



校章のいわれ

外側の形は地名の柳の葉を表し
中の盾は、柳の館にちなんでいる
そうです。（秋田県史より）



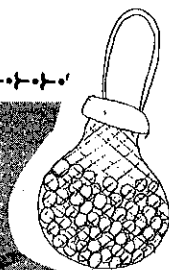
二宮尊徳翁の銅像

むかしのあそび、て
楽しいな!



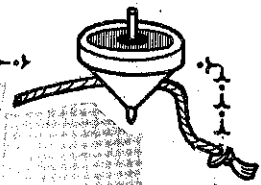
おじいさん、おばあさんとあそんだよ。
むかしは、今のようにたくさんのおも
ちゃはなかったけれど、みんなでなかよ
く、くふうしてあそんだんだね。

あんなにむずかしいことができたむか
しの子どもにまけないように、ぼくたち
も楽しくあそびたいなあ。



ヒメ
玉

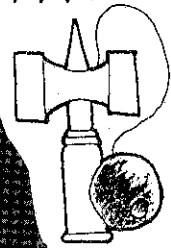
「ねら、て人さしゆびではじくんだよ。」



(ひめ)



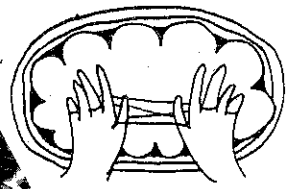
「ひものかけ方がむずかしいなあ」



(けん玉)



「えんぴつのようにもつんだね」



(あやとり)

「糸をはずさないようにゆびをぬんだよ」



(お手玉)

「下におとさないようにやれるかな」



お手玉のうた

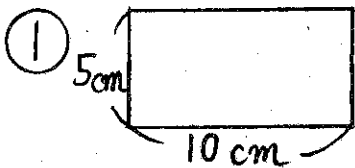
(梨平 長谷部カネヨ)
さんから

お月様はえらいな
お日様と兄弟で
三日月にな、たり
まん丸にな、たり
春 夏 秋 冬
世界国中 てらす

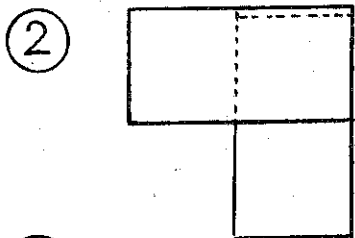
お月様はわかしな
いつも年をとらないで
くしのようにな、たり
かがみのようにな、たり
春 夏 秋 冬
世界国中 てらす

お手玉の作り方

(木村 ツタさんから)



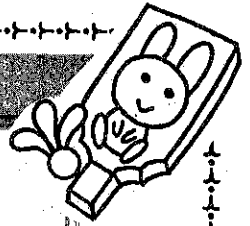
ぬの まい ようい
。布 4 枚を用意する。



。二枚の布をたて、よこに^{かた}重ねて
なか^{なか}おもて
中表にしてぬう。

③

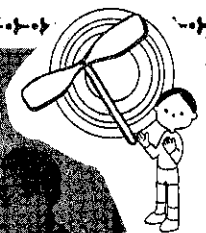
。中にはあずきなど小つぶの
豆を入れる。



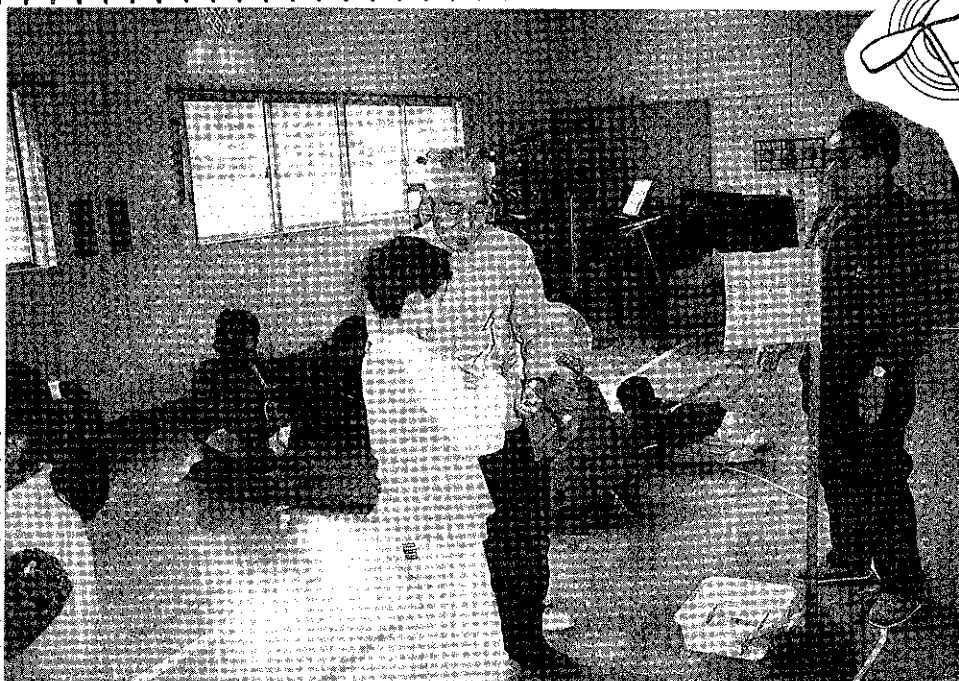
はねつき



「かたくてかわいい音がするんだね。」



竹とんぼ



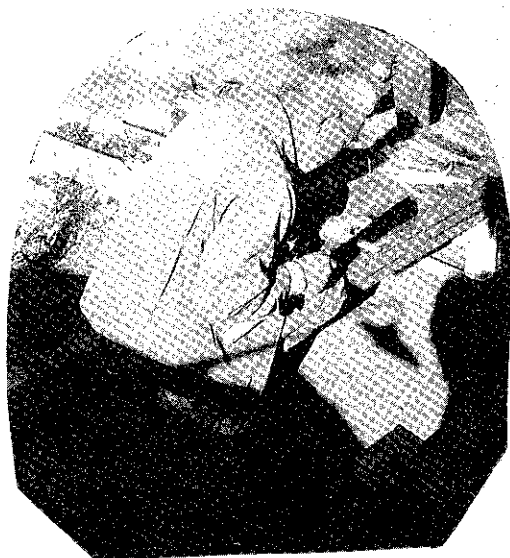
「手のひらで竹をもむようにするんだよ。」

竹とんぼの作り方

神居 謙嗣さんにききました。



1. 長い竹を竹とんぼの長さにする。
2. 竹とんぼのはねの大きさに、なたでわる。
3. はねを右と左がぎゃくの方こうに、ななめにカッターでけずる。
4. カッターでけず、た竹を、やすりできれいにみがく。
5. はねのまん中にキリであなをあける。
6. ほそい竹の先にボンドをつけてはねのあなにさしこむ。少しかわがしてでき上がり。



—— 下北手の偉人

『柴田傳兵衛』 ——

〈石ひを見つけた〉

松崎の新聞屋さんの所に傳兵衛さんの石ひがあります。そこには、次のようなことが書いてありました。



- ・ 不毛の地を開拓して九町歩を美田とした。
- ・ 傳兵衛さんをそん敬する人びとが集まって傳兵衛さんのすばらしさを後の人に伝えるために、この石ひを建てた。

松崎にある石ひ

＜傳兵衛さんの子孫の人に聞いた＞

★生まれたのは1804年（文化元年）で、子どものころの名前を常治と言いました。この家の主人は代々傳兵衛という名前を受けついで現在の主人は15代目です。

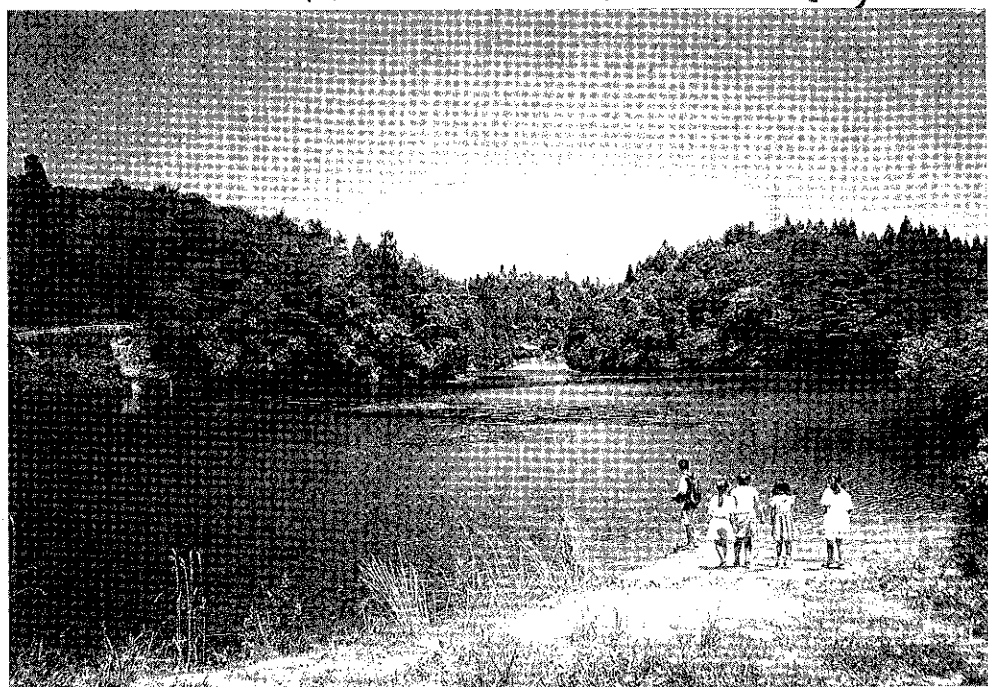
★傳兵衛さんのえらさ①

天保の大ききんの時、自分の家のお米を、食べ物がなく困っている人たちに分けてあげました。松崎の人たちだけでなく遠くから食べに来た人たちもいたそうです。その良い行いが、佐竹藩（秋田）の殿様にみとめられ、名字を名のることと、刀をさすことを許されました。そして、松崎地区の^{きもいり}肝煎（江戸時代にその地域の世話をし、とりまとめた人）となりました。

★傳兵衛さんのえらさ②

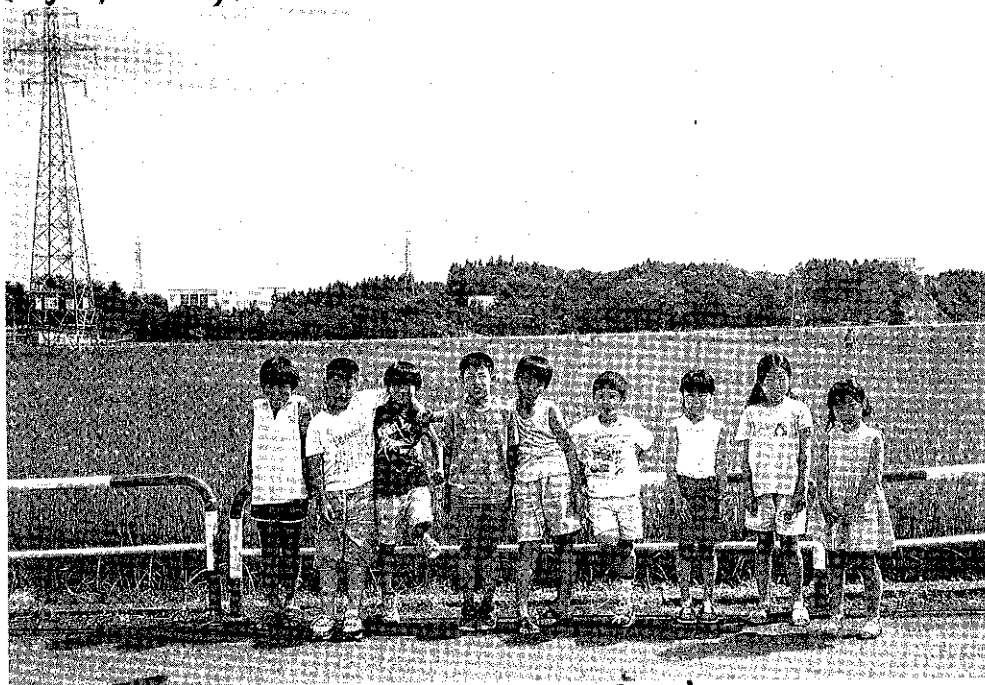
あれ地だ。た所につつみを完成させました。このつつみは、最初、谷内佐渡の佐々木藤堂さんが、工事に取り組みましたが、完成できませんでした。

傳兵衛さんは、そのあとをついで自分のお金を使って、3年かけて完成させました。地域の農家の人たちは、ただでいっしょうけんめい手伝いました。つつみができて、新しい田んぼが9町歩もでき



つつみがあったよ。

ました。傳兵衛さんは、新しくできた田んぼを手伝、てくれた農家の人たちに一反分ずつ分けてあげました。



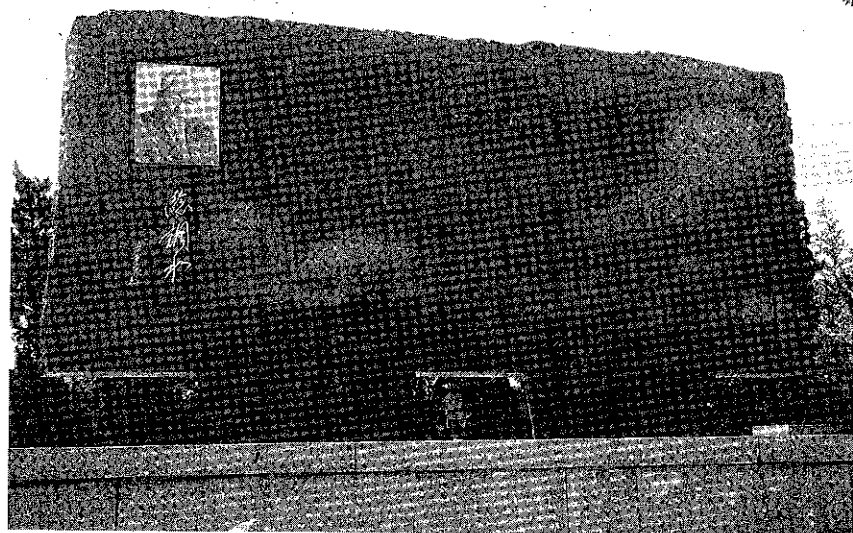
今ではりっぱな水田です。

傳兵衛さんの作。たつつみは、下北手だけでなく、樋^はを使って、太平川の上をわたしました。そして、広面の田んぼにも使われました。その樋のあった所の土地を今でも樋の口といいます。樋の下、樋の沖という地名もあります。

—— 古田重二良さんを探る ——

・ 明治34年 6月3日	河辺郡下北手村寒川で生まれた。
・ 大正6年	下北手村東小学校高等科を一番で卒業。
・ 大正10年	日本大学専門部法律科入学
・ 昭和28年	茨島に秋田短期大学と附属高等学校を建てた。
・ 昭和39年	短期大学を4年制の秋田経済大学とした。
・ 昭和45年	69才で亡くなった。

経済法科大学のバス停近くにある石ひ



平成元年
6月2日に
建てられた。

(高さ1.67m)
(横 3.8m)

重二良さんが生まれた家があった所に住む親せきのおじさんに聞きました。

- ・ 下北手東小学校は谷崎の個人タクシーのとなりの畑の所にあったそうです。
- ・ 短期大学と附属高校は昭和61年に下北手にうつったそうです。
- ・ 重二良さんが亡くなった後、本を図書館にあげたそうです。現在、それらの本は地いきセンターにあるそうです。
- ・ 石の下は、タイムカプセルがうめこあって、平成20年6月18日に開けるそうです。



重二良さんの親せきのおじさんと一緒に
平成十年七月三日
寒川にて

—おじいさんおばあさんが

子どものころの服そう—

男の子はみんなぼうず。

女の子は、ほとんどが手の
かからないおかっぱ頭だ
たそうです。

服は、着物やもんぺ、
または、男の子はシャツ
にズボン、女の子は、“か
んたん服”というワンピース
を着ることもありまし
た。

はき物は、くっはめず
らしくて、たいていげた
やぞうりをはいていたそ
うです。冬は、つま皮の
ついたげたやゴム長ぐつ
をはいたそうです。今の



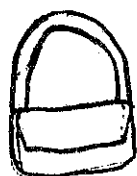
ゴム長ぐつとちがうのかな？

身につけていた物も今とはちがって
いました。

冬は毛糸であんだ手ぶくろ、ぼうし、
えりまきです。ジャンパーやオーバーは
着ることがなく、わたの入ったどんぶく
を着て寒さをしのいだ
そうです。また、くつ
下などはなく、色のつ
いた「たびをはいていた
そうです。



今、わたしたちは、
ランドセルをせおって
学校に通っています
が昔は、布でできたかばんやふろしきに、
教科書やべん当を入れて持っていたそ



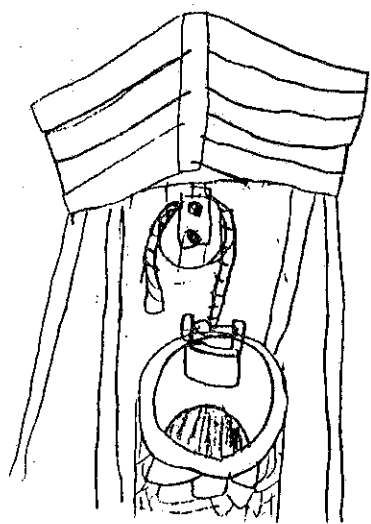
うです。服は、手作り
だ、たと聞きました。

——むかしの食生活——

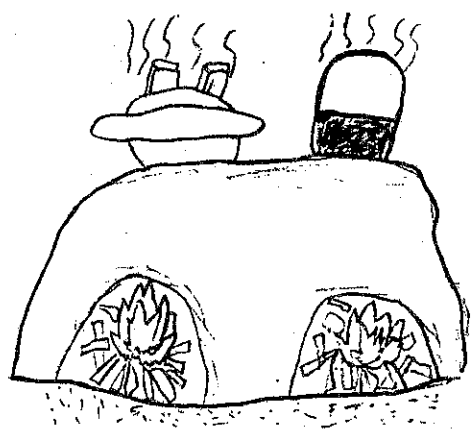
下北手に住んでいるおじいさんとおばあさんに子どものころの食事について話を聞きました。おじいさんは昭和8年、おばあさんは昭和10年生まれだそうです。

◎ 食事のしたく

水道はなく外にある井戸から水をくんでいました。ごはんは、かまどにまきで火をおこしてたきました。おかずは、魚を焼いたり煮物など作ったりしました。



いど



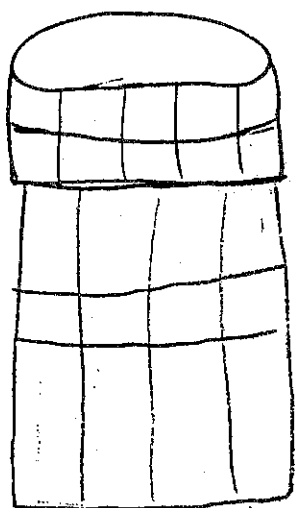
かまど

◎食事の様子

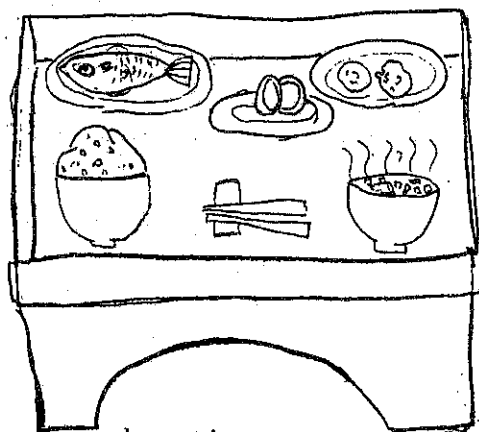
むかしは、兄弟姉妹が多くいたそうです。そして、いろいろの周りに家族みんなのおぜんをならべて、わいわい話をしたり兄弟のめんどうをみたりしながら食べたそうです。

◎食器

たいたご飯は、かまから「おはち」という入れ物に入れました。おぜんの上には、茶わんやおわんをならべました。食器はせと物でおわんは木でした。



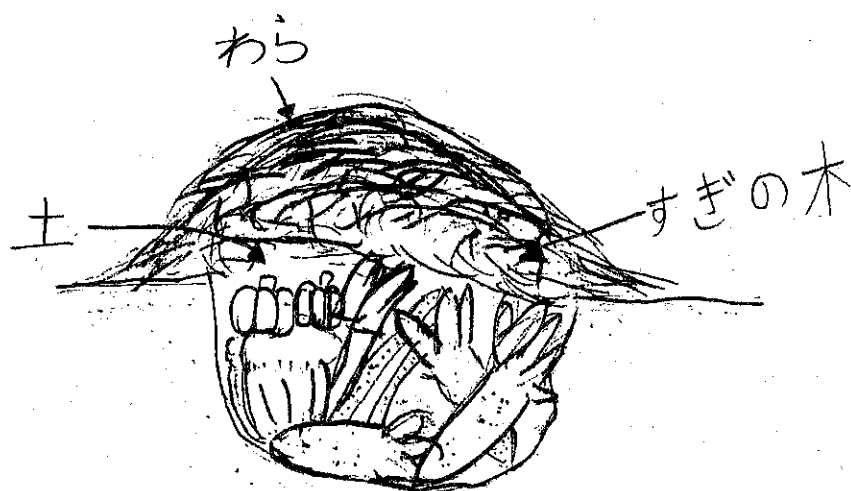
おはち



おぜん

◎ 食べ物

ほとんどが自給自足といって、自分たちで作った米や野菜を食べていました。冬は、食べ物がなくなるので、とれた野菜をかんそうさせたり、塩づけにしたり冬の間は穴をほり野菜を入れ土をかぶせてほぞんし、いつでも食べられるようにしていたそうです。また、家でにわとりをかって、たまごを産ませたり川で魚をとったりして食べました。

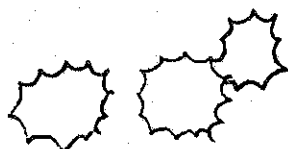


土の中にはぞんした野菜

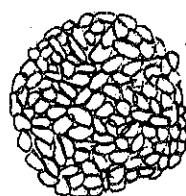
◎ おやつ

スナック菓子などではなく、畑の野菜や庭にある木の実（うめ、すもも、かきなど）を食べたり手作りのお菓子を作ったりしていたそうです。

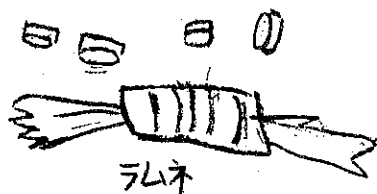
昔のおやつ



こんぺいとう



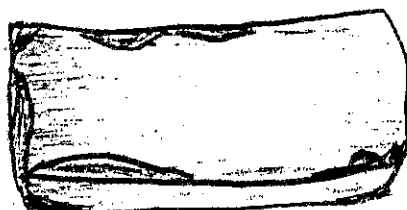
米がし



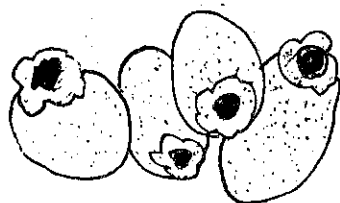
ラムネ



カルメ焼き



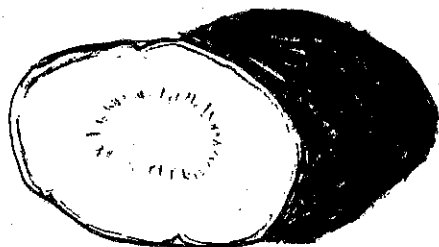
ぶがし



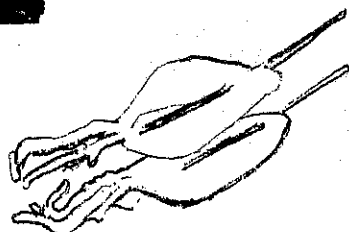
ほしがき



すこんぶ



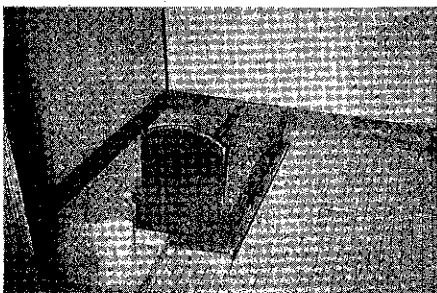
ぶがしもち



いかがし

—— どんな家に住んでいたのかな——

家は木と土とかわぶき屋根でできていました。げんかんは、土間になっていて雨の日や寒い季節には、そこで農作業やあら仕事などをしました。また、ほとんどの家では、牛や馬を家の中でかっていたそうです。農作業に使っていたのだそうです。



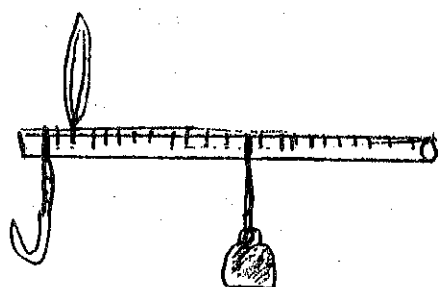
便所は、くみとり式で外にありました。大便小便は田畑のひりょうとしてつかっていました。

台所は、勝手とい、て水がめを利用し、水を大切に使、ていました。洗たくは、たらいと洗たく板でしていました。近くの川に洗い場があっ、て、そこで、洗たくをしたり、野菜や食器などをきれいにしていたりしたそうです。



土ぞうという土のかべで作られた、い、っぱでがんじょうなくらがありました。そこに、いろいろなものをして、ほぞんしていました。

— こん な道具も使。ていたよ —
〈物をはかる道具〉



野菜や魚などは、
ぼうのはかりを使
ってはかっていま
した。ぼうには目

もりがついていて、おもりを動かして、
つり合。たところの目もりを読みました。
ほかに、ばねばかりも使。ていたそうで
す。

〈こなにする道具〉

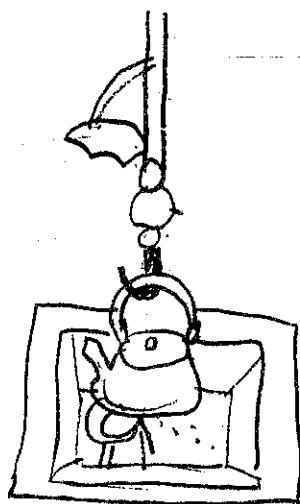


「てるり」という
道具で、まめをた
たいて粉をつくり
ました。

「石うす」では、米、小麦、とうもろこ
しなどを粉にするために使いました。

＜火を使う道具＞

「いろり」は部屋の中
かにうめこんでありま
した。体をあたためた
り、かぎになべをさげ
て料理にも使ったりし



ました。「かまど」も料理に使いました。
ご飯をたいたりお湯をわかしたりしまし
た。おふろは、木で作った湯舟でした。



まきでお湯をわか
しましたが、水がお湯
になるまで時間がか
かりたいへんなんぎ
したそうです。たい
ていの家では、行水
といって、大きなた

らいにお湯を入れて身体をきれいにあら
っていたようです。

下北手のお祭り

下北手に住んでいても、一度も下北手のお祭りを見たことがない人もいますので、下北手にはお祭りがあるかどうか調べてみることにしました。

白山神社については、松崎に住んでいる柴田傳十郎さんからお話を聞きました。柳館にある神明社と熊野神社については、村越忠男さんからお話を聞きました。

白山神社の春祭りとお祭り

春例祭は4月17日、秋例祭は9月17日に白山神社で行われます。お祭りの時は海のもの、山のもの、米、野菜、酒などを供えます。

お供えするもの



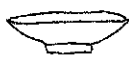
米



ほうれんそう



人参



酒



大根



もち



魚



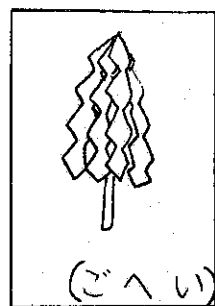
こんぶ



しるめ

その他のお祭り

春の祭りでは「豊作になりますように」と神様にお願いし、秋の祭りでは「作が実ってありがとうございました」と感謝をします。これらの大きなお祭りのほかに、2月の初めには初午祭りがあったそうです。それから田植えが終わった後には、虫がつかないようにと虫祭りをしてイネが病気にならないように願いました。昔は農薬がなかったので、田んぼの水が入る入り口に、おはらいをした「ごへい」を置いたそうです。



白山神社の神様

白山神社の神様はさくら ひめがみ菊理媛神

(白山みことひめの命)といい、すべての調和をはかり、人の和をつかさどる神様だそうです。

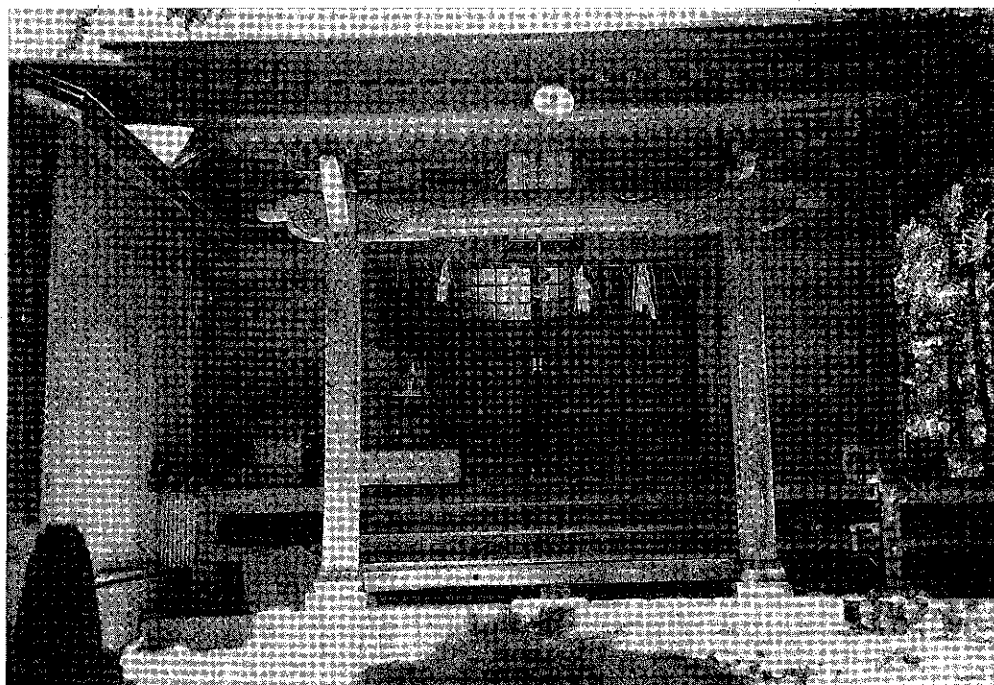
本社は石川県の白山山ちょうにあり、いつごろから神社があったのかははっきりしませんが、正徳3年(1713年)以前すでにあったと記録され、明治6年5月には下北手村村社に

なったと神社の案内板に書いてありました。

柳館^{うじこ}の神明社

昔は氏子の人がたくさん集まってお祭りをしたそうですが、今は人の集まりが少なくなっているの、春祭りは4月の第3日曜日、秋祭りは9月の第3日曜日と、日曜の日に合わせているそうです。

明治19年に神社が氏子たちの寄付によって改築されました。その時の寄付金の最高額は当時のお金で16円だったそうです。



昔は神社に学校の生徒全員がおまいりに来ました。おじいさんが子供のころは神社の中がすすしいので、神社でこま回しや勉強をしたそうです。

お祭りの時にはかまに湯をわかし、湯立てを行ってやくよけをしたそうです。

柳館の熊野神社

この神社は道路を作るために、場所を移して平成6年11月26日に新築されました。イザナギイザナミの命の夫婦をまつている神社で、土を焼いて作ったご神体があるそうです。

神社をそうじして管理している人を「別当さん」と言うそうです。

調べてみて

下北手にも
お祭りがあることを
知り、とてもびっくり
しました。

お祭りには、人々の願いが
こめられていることが
分かりました。

今は、大みそかや正月に
神社へ行くぐらいだが、
昔の人は毎月一回とか、よく
おまいりをしたのだなと
思いました。

犬を飼ってはいけないと
いう言い伝えがあった
ことを聞いて不思議に
思いました。

戦争中の下北手の様子

戦争があった時、下北手の人たちはどのように過ごしていたのかを調べてみました。

おじいさんやおばあさんたちに聞くと、第二次世界大戦の時の様子をくわしく教えてくれました。

①空襲があった時のこと

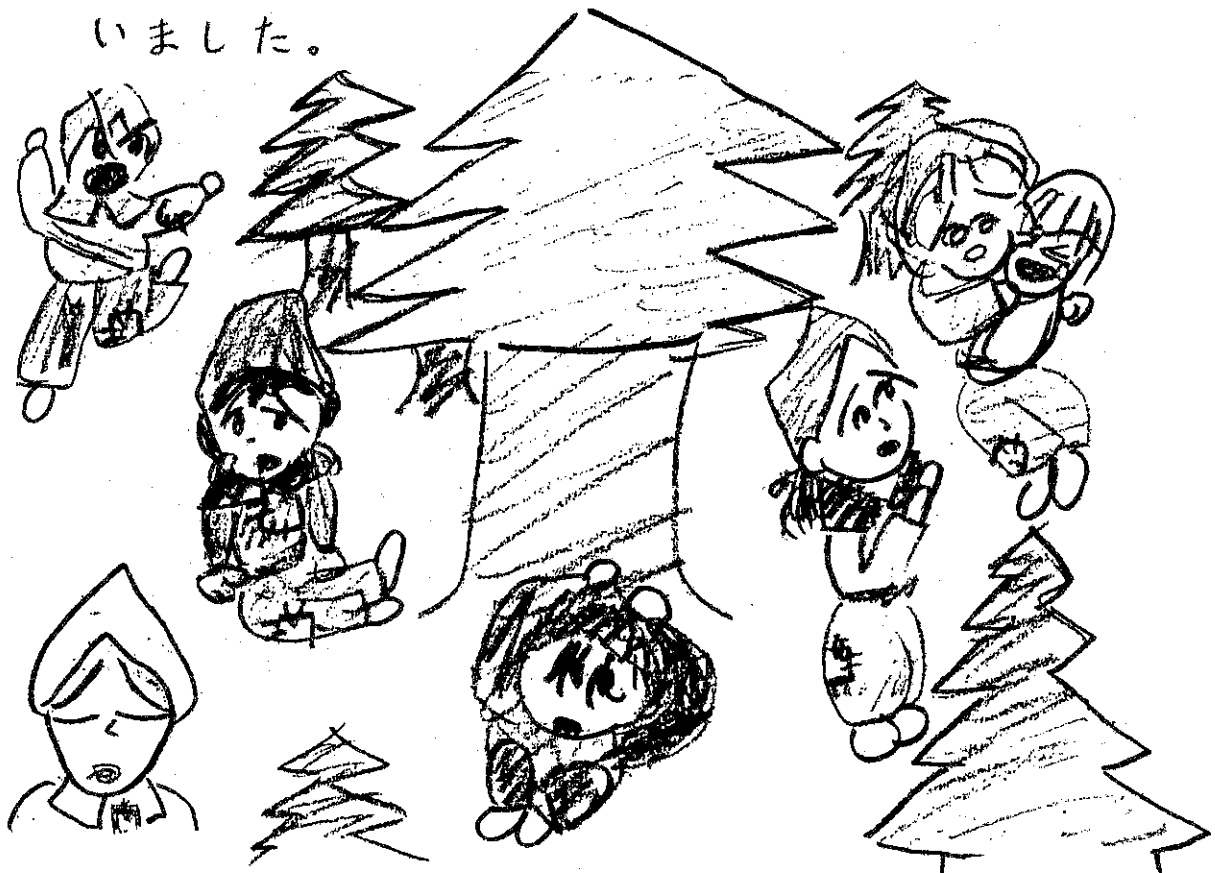
戦争中、秋田市にもアメリカの飛行機がたくさん飛んできて、爆弾を落としていったそうです。特に昭和二十年八月十四日には土崎にたくさんの爆弾が落とされ、多くの人の命が失われたそうです。

下北手は幸い山の奥の方だったので、あまり目立たず空襲をさけることができたのではないかと思います。聞いてみました。

戦争中は 敵の攻撃から逃げるため、目立たない場所に防空ごうという、かくれ場所を作ったそうです。しかし、下北手には防空ご

うがありませんでした。山が多か。たので、サイレンになると、大きな木のかげにかくれて、飛行機がいなくなるまでじ。としていたそうです。長時間待。ていなければいけなくて、とてもつらか。たそうです。

また、小さな子どもや赤ちゃんをつれて逃げなければいけない時は、だ。こやおんぶをして大変だ。たそうです。かくれている時も子どもが泣かないかと心配だ。たろうなと思いました。



② 食べ物の様子

戦争中は今のようになくさん食べ物がありませんでした。主な食べ物は、米・麦・野菜類（だいこん・だいこんの葉、ぱ・じゃがいも・かぼちゃ等）で、現在私たちが当たり前のように食べている白いお米は、とても貴重でめったに口にすることができなかつたそうです。特に、秋田市の中心部の人たちは食べ物を手に入れることがむずかしく、麦が手に入らない人は、よもぎなどの食べられる草を採ってきて食べていたそうです。下北手は田や畑が多かつたので、中心部の人に比べるとお米や野菜に困らなかつたということです。

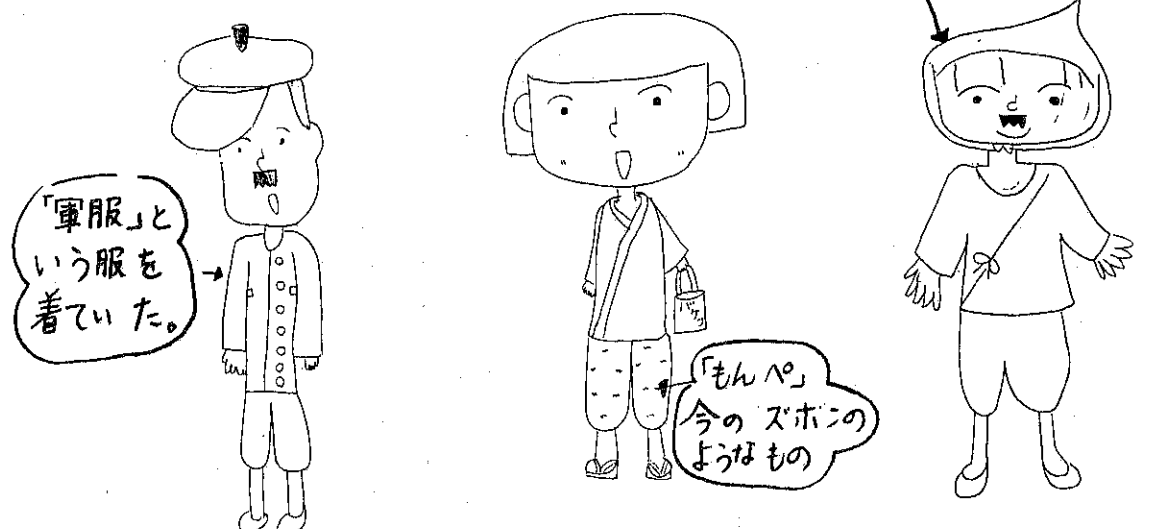
食べ方は、少ししかないお米と野菜を多く入れてぞうすいを作ったり、野菜を小さくきざんで塩味で煮たり、配給になつた小麦粉ですいとんを作ったりしていたそうです。

また、てんぷらなども食べていたそうですが、ひとつの半分くらいしか食べられなかつたそうです。

③ 戦争中の服装

いつ爆弾が落ちてくるかわからないので、頭にかぶるぼうし（防空頭巾）や服には、わたを入れて体を保護できるようにしていました。そして、腐らない食料を入れたリュックサックを背負い、いつでも逃げられるようにしていたそうです。

また、着る物が破れたりしても、新しく作ったり買ったりすることができませんでした。近所の人たちから、あまり布を集めて、ほつれた所を修理したそうです。



（戦争に行く人の服そう）（女の人服そう）（逃げる時の服そう）

今、川の水があふまない！

(1) 調べ方

下北手地区の中央部を流れている「宝川」の水のよごれについて調べてみました。調べ方は、上流の宝川地区から下流の桜幼稚園付近までを歩き、実際に自分たちの目でよごれぐあいを見てみました。また、柳館地区の水を採集し、水質検査用の薬品を入れて検査してみました。

(2) 調べた結果

水質検査器で調べた結果は「ややきれい」という結果がでました。けれども、調べている途中に拾ったごみは、次のとおりです。

・ 空き缶・空きびん・スプレー缶・ペットボトル・プラスチック製品・おわん

中には、流れているごみもありました。また、ところどころに油が浮いているところもありました。

(3) ふるさとの川を守ろう

今回の調査で予想以上に川がよごれていたのに驚きました。流れ出ていた油は、主に生活排水が原因ではないかと考えられます。調べている途中に、田んぼで働いている人が農薬をまいていました。これも川に流れこんでいました。このままでは、魚もすめなような川になってしまいそうです。

ふるさとの川をこれ以上よごさないようにするためには、

- 1、ごみを捨てない。
- 2、残飯は、できるだけ堆肥として使う。
- 3、使い終わった油は紙でふきとる。

(石けんを作って再利用する)

など、ひとりひとりのちょっとした心がけが大切だと思います。私たちの下北地域地域の川が、そして地域全体が、今より住みよい場所になるように努力していきたいです。

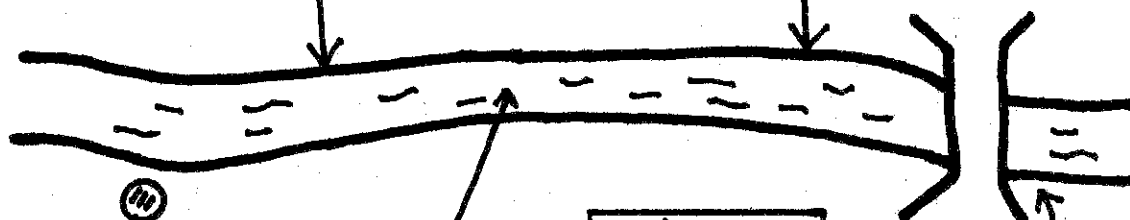


缶を拾う

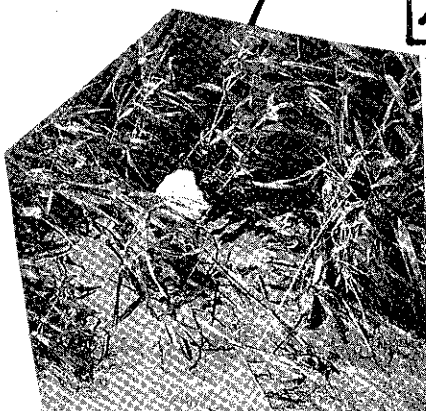
空き箱と
牛乳パック



柳館

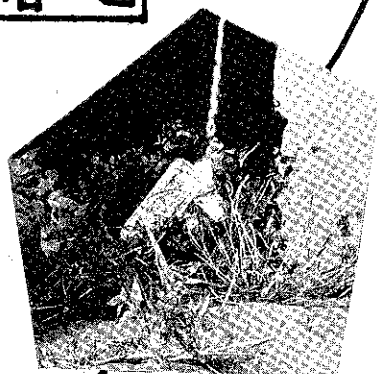


④ さくら幼稚園



ビニール袋が
流れていた

桜谷地



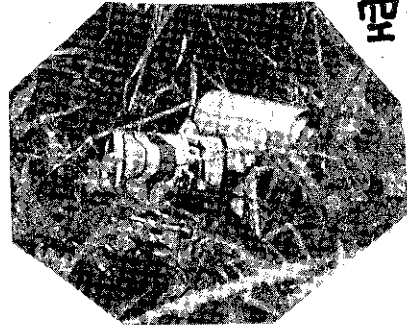
橋の下には
トレイが...

「宝川」の水のよごれ

川を流れる 空き缶

河川汚染の現状を調査するため、各地の河川に空き缶を投入し、その漂流状況を調査した。その結果、多くの空き缶が河川に投入され、漂流していることが確認された。これは、河川汚染の深刻さを示している。空き缶は、河川に投入されると、水の流れに乗って漂流し、最終的には海に流れ出ることが多い。这不仅对海洋环境造成威胁，也对河川生态系统造成破坏。因此，我们必须采取行动，减少垃圾的随意丢弃，保护我们的水资源。

捨てられていた 空き缶



油が
浮いていた!

宝 - 川

宝 川

油が
流出

曲
展
藻
を
散
布



下北手にできた中央インターチェンジ

下北手小学校の近くに中央インターチェンジへのアクセス道路（秋田駅東中央線）ができ、地下道「パルパス」もできました。そこで、交通量がどのように変わったのか、アクセス道路につながっている秋田中央インターチェンジについて調べてみました。

調べた方法

日本道路公団秋田管理事務所の佐藤さんから資料をいただいて調べました。子どもが直接事務所へ行くのは交通安全の面であぶないというので、質問は紙に書いてファックスで送りました。

中央インターチェンジ Q.&A.

Q.1. 秋田中央ICから東京までの高速料金は？

A. ・軽自動車→10,000円 ・普通車12,300円
・中型車→14,600円 ・大型車20,450円
・特大車→33,000円

Q.2. 秋田中央ICから東京までの時間は？

A. 7時間12分（高速以外の時間は入っていません。）

Q.3. 秋田・仙台間で高速道路を使った時と使わない時の時間差は？

・ 高速道路使用時 3時間30分

（秋田中央ICから仙台宮城IC）

・ 使わない時 4時間55分

（13号，鬼首，古川，4号）

※時間は道路時刻表を使い、法定速度で計算したそうです。

Q.4. 秋田中央ICの月平均の出入交通量は？

平成9年		平成10年	
11月	57,538台	1月	55,993台
12月	69,050台	2月	55,995台
開通から平成10年 6月までの平均台 数を計算すると、 月平均68,785台。		3月	77,596台
		4月	74,518台
		5月	83,316台
		6月	76,314台

Q.5. 秋田中央ICの建築費用は？ 面積は？

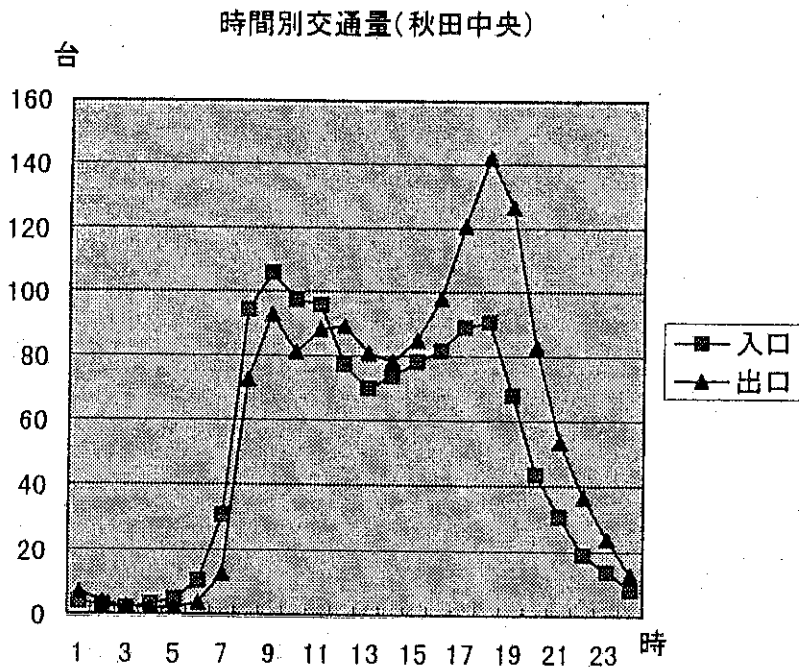
工事費用9億円 面積69000㎡

Q.6.一番交通量の多い日は？

A. 休日。特にゴールデンウィークが多い。

Q.7.交通量の多い時間帯は？

A. 朝、夕の時間帯が多い。



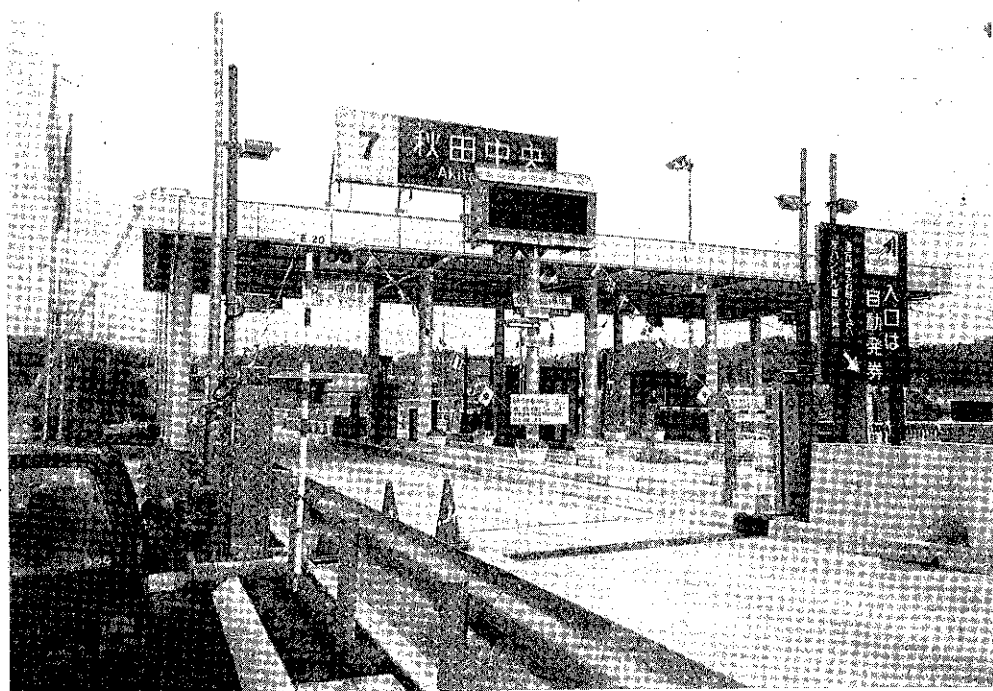
平成10年4月から6月までの3ヵ月間日平均時間別交通量

Q.8 中央ICを下北手につくったわけは？

A. 秋田市中心部に近く、インターチェンジをつくるスペースがあったから。

これらの質問のほかに、インターチェンジ

をつくるために働いた人の数や、建設中一番大変であったことなども聞いてみましたが、「はっきり調べることができない」ということでした。



調べてみて

時間別交通量を見ると、秋田中央インターチェンジはよく使われることがわかりました。

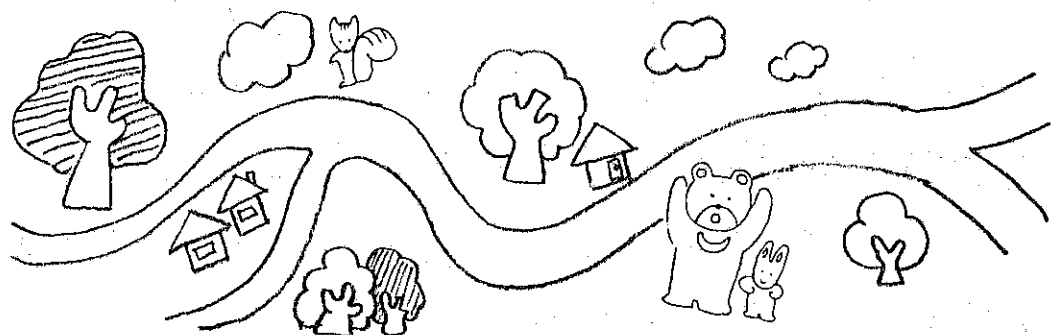
他の県から秋田へ、秋田から他の県へと高速道路で短時間に行き来ができるようになったので、秋田に来る人や住む人がもっと増えてほしいと思いました。

≡ 町内別名字調べ ≡

下北手地区には、他の地域にあまりいないめずらしい名字があります。そこで、どの町内にどんな名字の人が多いのか調べてみることにしました。

調べるために、学校にある住宅地図をコピーしてもらってつなぎました。そして、一軒一軒チェックしながらノートにまとめていきました。昭和60年発行の「きょうど下北手」を参考にし、世帯数の移り変わりも見えるように、地図にまとめることにしました。

調べてみて、一番大変だったことは、コピーした地図をパズルのようにつないでいくところと、地図から町内を探すところでした。



千秋の丘や梟住、白山、緑が丘の団地ができる前の旧町内の名字を見ると、一つか二つの姓にかたよっていることが分かります。松崎の柴田さんは特に多かったです。なぜかなあと思いましたか、同じ地域に住んでいる人が土地や家を守るためだと思われます。松崎町内は柴田傳兵衛さんの出身地なので、傳兵衛さんの意志をひきついで、子孫や親戚の人たちが住んだのだと思います。

また、子供が成人となって家を出るときに、少し離れた隣町内へ移り住んだ人もいます。

それに比べて、新しくできた団地には、いろいろな名字の人が住んでいます。これは、仕事などの関係で、いろいろな地域から移ってきた人が多いからだだと思います。



至 太平小学校

日

中央 I・C

山影も
多い
です
寒川

	S46	S60	H10
1位	井川	井川	井川
2位	村越	村越	村越
3位	嵯峨	嵯峨	嵯峨
4位	古田	古田	古田

	S46	S60	H10
1位	村越	村越	村越
2位	進藤	進藤	進藤
3位	玉尾	玉尾	玉尾
4位	佐々木	佐々木	佐々木

寒川は
古田重良さんの
出身地です

	S46	S60	H10
1位	川村	小林	川村
2位	小林	川村	小林
3位	木山	木山	木山
4位	門脇	門脇	門脇

宝川

F

通沢

黒川

	S46	S60	H10
1位	須田	須田	須田
2位	手塚	手塚	手塚
3位	飯塚	飯塚	飯塚

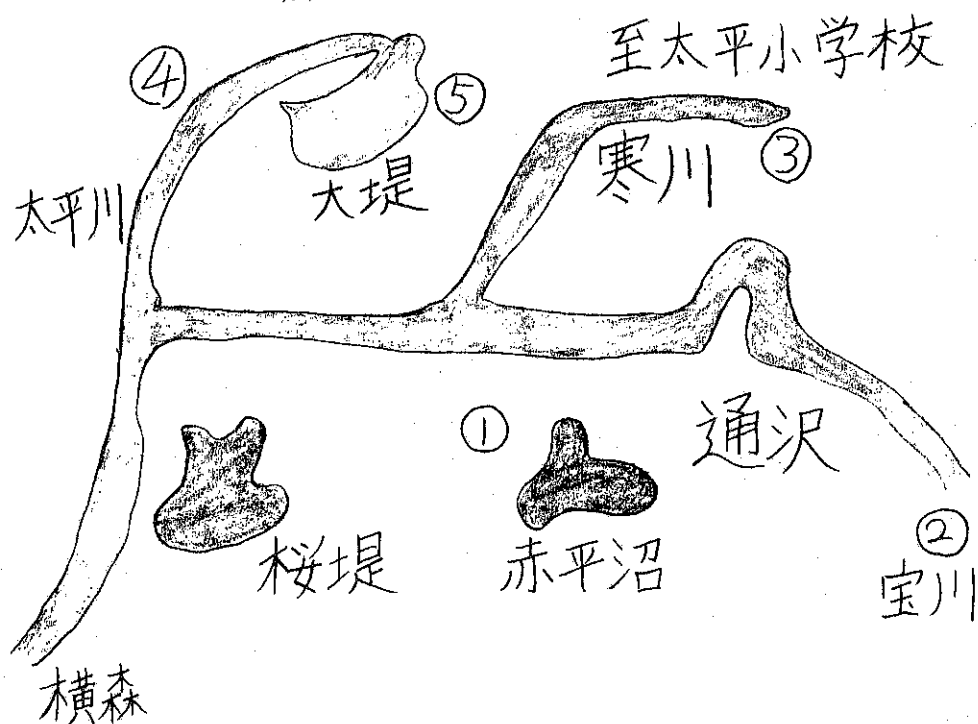
	S46	S60	H10
1位	阿部	石塚	石塚
2位	石塚	阿部	阿部
3位	佐々木	佐々木	佐々木
4位	進藤	小林	

河辺町

下北手の川や沼にすむ魚

下北手には魚がつかれる川や沼がたくさんあります。寒川と宝川は柳館の所で合流し、さらに広面の方で太平川に合流します。

魚のつかれる場所

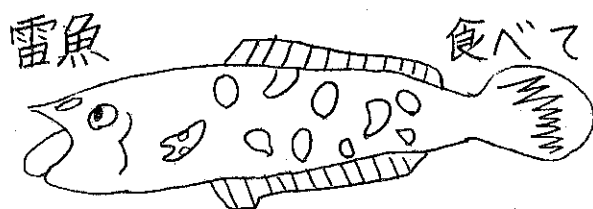


つかれる魚

- | | | | |
|---------|----------|-------|-------|
| ①でつかれる魚 | ・ ライギョ | ・ フナ | ・ コイ |
| | ・ ブラックバス | ・ タナゴ | |
| ②でつかれる魚 | ・ オイカワ | ・ ゴリ | ・ ハヤ |
| | ・ ナマズ | ・ コイ | ・ ウグイ |

- ③でつれる魚 ・コイ ・フナ ・ウグイ
- ④でつれる魚 ・コイ ・ニゴイ ・ウグイ
 ・バス ・タナゴ ・ナマズ
 ・フナ ・ライギョ
- ⑤でつれる魚 ・ブラックバス ・ライギョ
 ・フナ ・コイ

(ザリガニなどの小動物を
 食べている。)



フナ



ウグイ

ブラックバス



今と昔を比べるとブラックバスが増えています。

あとがき



昨年 11 月、下北手地区を南北に走る秋田自動車道が完成し、秋田駅東から中央インターチェンジに通じるアクセス道路も完成しました。この道路の完成で、下北手地区の交通の様子も大きく変わりました。

時折、この道路を悠々と横切る「かもしか」を見ることがあり、どこへ帰っていくのか見届けたいと思ったものでした。また、かわいい「コノハズク」の幼鳥が迷い込み、体育館のわきにうずくまっているのが見つかりました。

今後も、このような野生の動物が住み着く自然が残されるように、切に望まないではられません。

わたしたちは今、きょうどに生きた人々の努力に感謝すると共に、今のわたしたちの暮らしを見つめていきたいものだと思います。

「きょうど下北手」3号を発行するにあたり、下北手農協、地域センター、地域の皆様、また、1・2号作成に力をかけて下さった皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、作成にあたり次の資料を参照しました。

- ・秋田市史昭和編
- ・「我が村」昭和5年
- ・学校沿革誌
- ・学籍簿
- ・卒業台帳
- ・きょうど下北手（昭和47年発行）
- ・きょうど下北手（昭和60年発行）

（白石）

編集同人

三浦 憲子
山縣 真由美
土橋 慶子
佐々木 広宣
鈴木 史子
武田 謙三
大友 睦

羽 深 進
佐々木 はるみ
加藤 優子
村田 由紀子
武田 洋子
鈴木 洋子
森合 映子

照井 俊之
石郷岡 晶子
藤盛 裕子
佐藤 牧子
佐藤 多香子
斉藤 千賀子
白石 宏代

きょうど下北手 第3号

発行日 平成11年2月20日
編集・発行 秋田市立下北手小学校
(秋田山下北手松崎字谷崎202-1)
印刷 秋田ワークセンター
電話 831-8010

